

ある日突然番外編に

満足な愚者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なあ、少しだけ話を聞いてくれないか。

『ある日突然英霊として召喚された』

——どう思う？

「ある日突然中世フランスに」から始まる「ある日」シリーズの番外編です。

本編には全く関係ないので、読みたい方だけお読みください。

もしかしたら、ありえたかも知れないカルデア編がメインですが、基本的に作者の書きたいものを書いていきます。ドンレミの村のジャンヌもあるかも……。

一話と二話は本編にて掲載させていただいたので、実質三話が一話のようなものです。

また、作者の力量不足のため誤字脱字が多いかもしれません。もしもお手数では無ければ報告していただくと大変助かります。

# 目次

その一	オルタ編	1
その二	デオン編	10
その三	ジャンヌ編	17
その2		26
ある春の日の話		32
ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ編		42
吹雪の止んだ深夜に		52
カルデアの夜に最後のマスターと	前編	61
カルデアの夜に最後のマスターと	後編	67
第六特異点編		
その一		81

## その一 オルタ編

ソイツは何時もと同じく急にやって来た。何時もの朝、カルデアにあてがわれた自室にて机に座り、本を読んでいた時の事、ソイツは何時ものようにノックもせず、扉を壊さんばかりの勢いで開けた。

——バンっ！

何かの恨みが扉にあるのかどうかは俺には分からないが、結構な勢いで開けられた扉はダヴィンチちゃん特製の最高度の強度を誇るよく分からない材質で出来ていなければ数回も立たずに壊れそうな勢いがあつた。

「朝よーおはようー！」

ソイツ——ジャンヌオルタは何時もより妙に高いテンションで俺の部屋に入ってくる。勿論、家主の俺の許可何て取るはずもない。勝手知つたる人の家と言つた感じだ。こう言う所は姿が変わつても昔のままだつた。

ちなみにだ、ジャンヌが入つて来た扉は俺の部屋にある正規の扉ではない。俺と部屋が隣同士のジャンヌオルタが自らの部屋の壁をぶち抜き俺の部屋に乱入してくるという事が何回かあつた後に、腹にすえかかねたダヴィンチちゃんによつて壁の代わりに作られた扉だ。

俺とジャンヌオルタの部屋は廊下を行き来しなくても、扉一つで文字通り行き来出来るようになってしまつていた。

ついでに言えば、そのジャンヌオルタ専用の扉の反対側には白い方のジャンヌ、ジャンヌダルクの部屋に続く扉がある。オルタだけ、ズルいとジャンヌが抗議した結果ダヴィンチちゃんとマスターの判断の下設置された扉だつた。

つまり、俺の部屋には何故か扉が三つもあるというよく分からん状況であり、ジャンヌオルタの部屋、俺の部屋、ジャンヌダルクの部屋と言つた具合に行き来できる状況の訳だ。

一応鍵と言う物もあるのだが、サーヴァント相手にそんなものは有つてないようなものだ。ダヴィンチの最高強度を誇る鍵と扉であつても『吼え立てよ、我が憤怒（ラグロントメントデュヘイン）の

前にはあつけなく破壊される。さすが宝具ランクA+だ。俺のただの西洋剣とはわけが違う。

よって鍵なんて言うものは時間稼ぎしかならないため、掛けないようにした。毎回毎回、壁を修理する羽目になるダヴィンチちゃんも可哀想だし、部屋を毎回焦がされては俺もたまらない。

しかし、そうになるとプライベートなんて物が無いにも等しくなる。そこで、ある決まりをマスター監修の下に決めた。「夜の八時から、朝の八時までの十二時間、この扉の使用を禁ずる」と言ったものだ。

もちろん、この扉と言うのは俺の部屋の左右に後付けされたその場であり、正規の扉の方は使用可能だ。もちろん、正規の扉を使う場合でもお互いに許可がないと入れないことになっている。

ちなみに破ると、令呪による強制部屋替えだ。

そんな罰で二人が約束を守るか心配だったが効果は靦面のようで、この決まりが破られることはなかった。

ちなみに、今ジャンヌオルタが俺の部屋に突入してきた時間は朝の八時を二三秒回った状態であり、ルールのにはセーフだ。

「おはよう、今日はやけに元気だな」

このカルデアには二人のジャンヌがいる。今俺の部屋にいる黒いジャンヌ、元竜の魔王のジャンヌオルタと救国の聖処女、ジャンヌダルクだ。二人の要望もあり、俺は黒い方のジャンヌをオルタと呼び、白い方のジャンヌを普通にジャンヌと呼ぶようにしている。

「ええ、何と言っても今日の午前中はあの白い忌まわしい聖女様がレイシフトでいないんですもん！ これを喜ばずして何を喜ぶと言うのです！」

まるで今にもスキップしそうな勢いでオルタは何時もの定位置の俺のベッドに腰を掛ける。

「お前ら、本当に仲が悪いな……」

呆れたように言うと、

「何を言っているのです！ 当たり前ではないですか……誰があんな聖処女と仲良くなんか……」

オルタは考えるだけでも忌々しいと思ったのか、顔を苦くしかめる

と、

「スンスン……この匂いは……。昨日の夜、私がレイシフトしている間に誰かこの部屋に……。それに、お酒の匂い？」

そう鼻を鳴らし、辺りを窺いながら言う。その顔は怪訝そうだ。

「ああ、それか……。昨日デオンが訪ねて来てね、二人でこの部屋で飲んだんだよ」

このカルデアには様々なサーヴァントがいる。それなりに長い間ここで暮らしていると仲の良くなったサーヴァントも出来てくる。特にデオンの場合は色々縁があったものだから、このカルデアに来てからも仲良くさせて貰っている。

「あの泥棒猫め……。私と白いのがいない時を狙って……。！」

オルタはブツブツと何か言ったかと思うと、急に顔を上げ、

「よし！ 今日という今日は我慢できないわ！ あの、男女（おとこおんな）を憎悪の炎で包んで、灰にしてやるわ！ いや、灰すらも残さずに……。！ 我が憎悪に磨かれた魂の咆哮はこの日のために……。！」  
などといきなりとんでもなく物騒なことを口走り始めた。

「何を言っているんだ。そんな物騒なことは止める」

「で、でも……」

「でもも、何も無い。止めるんだ。それに、今日はデオンは聖女と一緒にレイシフトしているよ」

「くっ……。逃したか」

彼女はそう言うと、何を思ったのか、

「じゃあ、私も飲むわ！」

と、口に出した。

「——は？」

「は、じゃないわ！ あの男女と飲んだから私も飲むべきよ！

ええ、そうよ！ 私も一緒に飲めばいいのよ！」

「飲むって、何を？」

「何をって、お酒以外に何があるって言うの！ さあ、飲むわよ、準備しなさい」

「いやでも、まだ朝だぞ」

「朝から飲んでではダメな法はないわ！ 私は今日はレイシフトの予定はないし、一日休み、それに食堂に行けば朝から飲んでる奴は、ゴロゴロいるわよ」

「た、確かにその通りだが、でも、この時間からはさすがに……」  
「うるさい！ この私が飲むって言ったら飲むの！」

「分かった分かった！ だから、そうベッドをバンバンと叩かないでくれー！」

「分かればいいのよ、分かればー！」

渋々と言った形で備え付けの冷蔵庫を開ける。中にはワインと、ラム、そして缶ビールと缶酎ハイが入っていた。

——うーん、とりあえず俺はビールとしてオルタはどうする……。

とりあえず、缶酎ハイでも渡しておくか？ それともフランス的にワイン？

昔のことを考えるとこっちだな。

「はいよ、これでいいか？ そもそも、お前飲めるようになったのか？

あのドンレミの村の時は……」

昔、ドンレミの村の収穫祭にて、大人ぶってワインを一口飲んだジャンヌは、顔を赤くさせ目をくるくる回し気を失うように寝ていたことを思い出す。ちなみに次の年の収穫祭では、ペろりと一口舐めただけで顔を真っ赤に染めて直ぐに寝ていた。

「あの村娘のちっこい私とは違うのよ！ サーヴァント化した今ならワインの一本や二本余裕よ！」

どこからそんな自信が湧いてくるのか知らんが彼女は大きく胸を張る。

そして、俺が渡したのを見ると、

「何よ、チューハイって！ 度数も三パーセントしかないじゃない！」  
「まずは軽くそれを飲んで、次にもつと度数が強い奴を飲めばいいだろ？ それに俺もビールだし度数は変わらん」

「むう……もたもたしているとおの白いのが帰ってきそうだし、いいわ、分かったわ！ でも、これを飲み終わったら、ワインやラム酒を飲ませるのよ」

「はいはい、分かった分かった。とりあえず、乾杯」

「ええ、乾杯」

お互いに缶を掲げる。

しかし、勢いとはいえ、朝から酒を飲むって完全にダメな人間だよなあ……。

冷えたビールは美味しかった。

「ううー！ 聞いているの！ だから、アナタは他のサーヴァントに構い過ぎなの！」

それから、十数分後、缶酎ハイ一本で酔っぱらったオルタがいた。見事にフラグを回収したわけだ。

サーヴァント化したから酒が強くなったという言い分はどこに行ったのか知らないが、彼女は顔を真っ赤に染め、酎ハイをチビチビと舐めるように飲みながら、俺に絡んで来る。

まあ、寝ることがなくなっただけ、強くなったとは言えるのだが、流石にこうなるとは思わなかった。

「あの……もうそろそろ、飲むのは止めた方が……」

「何言ってるの！ 私は今日は飲むの！ 飲む日なの！」

彼女は顔を真っ赤にしつつもその手から缶を離すつもりはないらしい。ちなみに、その缶にはまだ半分は酎ハイが残っているようだった。

「分かった分かった」

「分かればいいのよ！ 分かれば！ むう、アナタが飲んでいる方も

美味しそうね、一口貰うわ！」

オルタは赤く染まった顔をグイツと横に座る俺に近づけると、空いていた左手で俺の缶ビールを奪い取り、一口。

「——あつ」

止める暇はなかった。

ちなみに、なぜ俺がオルタの横に移動しているのかと言えば、酔っぱらった彼女が横に來い、横に來いとうるさかったからだ。

「——に、苦いじゃないの！ これ！」

やっぱりと言うべきかビールはオルタには早かったらしく、顔を思いつきりしかめる。

「お前が勝手に飲むからだろ、それにこれはその苦みがいいんだ」

「私にはよく分からないわ……。それよりも絶対に私が飲んでいる方が美味しいんだから、ほら！ 飲んでみなさいよ」

「分かった！ 分かったから！ そんなに暴れるな！ 零れるだろ！」

無理やり俺の口に缶酎ハイを近づけて飲ませようとしてくるオルタから缶を受け取り、飲む。

柑橘系の甘い普通の酎ハイだ。度数的にもただのジュースを飲んでいる感覚に等しい。

俺的にはビールの方が断然好みなのだが、正直に言うとおルタが絶対にめんどくさい。

なので、ここは

「ああ、美味しいな！ 俺もそっちの方が好きだよ」

と言っておく。嘘も方便というしたまには良いだろ。

「当たり前でしょ！ 何といってもこの私、オルタ様を選んだのだから！」

どうやら、彼女の中ではいつの間にか、俺が適当に冷蔵庫に転がってあった酎ハイを渡した事実がなくなり、自分自身で選んだことになっているようだった。

これは相当酔ってるな、こりや。

「もういい加減、止めた方がいいぞ。相当酔ってるみたいだし」

「私が酔ってる？ そんな筈ないわ！ だって、こんなに気分が良いんだもん！ こんな酎ハイ一気飲み出来るわ！ ——ごくごくごく！」

オルタは俺の手から酎ハイを奪い返すと、一気に煽る。

——あああ、こりやもうだめだ。

「ほら、みなさい！ 酔ってなんかないでしょ！ そして、何度も言うように、アナタは最近、他のサーヴァントに構い過ぎなの！ もっと、私を——ふきゆう……！」

一気に回って来たのか、彼女はそこまで言うそのままベッドに倒れ込んだ。

——すう、すう。

聞こえてくるのは穏やかな寝息。どうやら、寝たようだ。

「つたく、無駄に世話を焼かせやがって」

缶ビールを一気に煽ると缶をゴミ箱に投げ入れ、オルタをしつかりとベッドに寝かせる。出来ればオルタの部屋まで連れて帰りたいのだが、女の子の部屋に許可なく入るのは気が引けるので、悪いが俺の部屋で我慢してもらおう。

「まあ、最近はレイシフトやらで忙しいもんな。たまにある休日くらいゆっくり休みな」

風邪を引かないように布団をかぶせ、短くなった髪を撫でる。

力のない俺とは違い強いオルタはレイシフトに欠かせない存在になりつつある。ストレスが溜まるのも分かる。つかの間の休日くらい好きにさせてストレスを発散させて、ゆっくり休んで欲しいものだ。

さて、あまり女子の寝顔を見るのも悪いし、食堂でもいくか……。

「すうすう——お兄ちゃん、また会えたね——」

家主のいない部屋に響いたその寝言を聞く人物は誰もいなかった。

——そして、レイシフトから帰って来たジャンヌが俺のベッドで寝ているオルタを発見して一悶着あるのは、また別の話で、翌日二日酔いが治ったオルタが昨日のことを思い出し、あたふたと部屋で暴れる羽目になるのも、また別の話だ。

おまけ

ある日のレイシフトにて

「しかし、マスターこのメンツってどんな組み合わせだ？」

「どんなって言われてもくじ引きで決まったとしかいいようが……」

「確かにくじ引きで決めたからしようがないと言えましょうがないが、悪意のある組み合わせだよな、これ絶対」

「そう言えば、悪魔の軍の隊長さんは久し振りだっけ、レイシフト？」

「最近はさっぱりだったから、いつ振りだろう……。レイシフトした回数も指で足りるんじゃないかな」

「まあ、旦那はあれだから、敵を殺すには向いてないからしようがない。でもまあ、このメンツはなあ……」

アールシユ、悪魔の軍隊長、フレンド アールシユ。以上。

「いくらフレンドを含め、全てくじ引きで決めたとはいえ、どこかの陰謀を感じらさずにはいられないメンバーだな」

「まあ、でも今日は種火集めだし、すぐに終わりますよー！」

「そうなればいいけどな、マスター。つとよりあえず、敵が出て来たか。悪魔の隊長さんは久しぶりの実戦だろうし、ゆっくり様子見てくれよ！　まずは俺たちから逝くからよ」

「え？　なんか今、いくと言う字が違うくなかったですか？」

「気にするな、マスター」

「陽のいと聖なる主よあらゆる叡智、尊厳、力をあたえたもう輝きの主よ我が心を、我が考えを、我が成しうることをご照覧あれ」

「ちよつと待つて、アーラシユさんいきなりそれは——」

「さあ、月と星を創りしものよ我が行い、我が最期、我が成しうる聖なる献身（スプンタ・アールマティ）を見よ—— 『流星一条（ステラ）!!』」

「おうおう、見事にいったな。じゃあ次は俺の番だな」

（以下略）—— 『流星一条（ステラ）!!』

「なるほど、これは即ちそういう事か」

「え？　隊長さん何を言っているんですか？」

「立香、後は頼んだ。—— 『必死必殺』」

——そして、誰もいなくなった。

「って、隊長さんの宝具対象一人だから、いるってまだいるって！　あと二体敵はいるって！　え？　え？　これ本当にどうするのよおおおおおおお!!」

## その二 デオン編

それは一段と気温が落ち込んだ冬のある夜の出来事だった。いつも通り食堂にて少し早めの夕食としてアーチャーエミヤの作った料理に舌鼓を打った後、カルデアに宛がわれた自室にてのんびりとしていた時だった。

——とんとん。

そんな控えめなノックが聞こえて来た。時計の針を確認すれば、夜の七時に後十分ほどでなろうかという時刻。

ノックされたドアは何故か部屋に三つあるドアの内の正規のドア、即ち廊下へと繋がっている物からだった。

——こんな時間に誰だ？

正規のドアという時点でまず、あのジャンヌ二人組の線は消える。アイツらはそんなまどろっこしいことはせずに自分の部屋から直接俺の部屋向かうことのできる扉を使うし、そもそもノックなんて物をしていないことの方がほとんどだ。

——後考えられる線と言えば……。

まあ、いいや悩んだところで何も解決しないし、とりあえず出て見ればいいか。

「あいよ、今出るからちよっと待っててな」

何も考えず鍵を開けて扉を開けば、

「やあ、先ほどぶりだね」

ジャンヌとは少し違い金と銀を織り交ぜた様な柔らかな金色の長髪に、青色の普段着を来た人物が一人。

扉の向こうにはいつも通りの優しい笑みを浮かべたシュヴァリエ・デオンの姿がいた。

「デオンじゃないか。今日はどうしたんだ？」

「どうしたって何か用が無ければキミのところには来てはいけなかい？」

「いや、そんなことはないが……。まあとりあえず入りなよ」

立ち話も何だと言うことで部屋へと案内する。その案内受けデオ

ンはいつも通り俺のベッドへと腰をかける。いや、ジャンヌ達もそうだけどカーペットにある座布団ではなくてベッドに腰を掛けるのはなんでだろうな。

別に不快でも何でもないんだけど、不思議に思ってしまった。あ、あれかやつぱり国境の違いか。それならイシユタルあたりだとどうなるんだろうか……。いや、俺の部屋にあいつが来ることはないと思うが……。

「相変わらずだね、キミの部屋は」

そんな変な納得を内心でしていた俺に対してデオンは言う。その顔持ちからは緊張の色は見えない。まるで自室にいるかのようにリラックスしているようだった。

「変わり映えもなにも、物があまりないからな。殺風景だろ？」

俺の部屋にある物といえば、備え付けの冷蔵庫に、ガスコンロ、そして本棚にベッド、あとはクローゼットにイスと机くらいなものだ。寒くなって来たので炬燵でも出そうか考えてはいるがいつも面倒くさくなって後へ後へとずるずる伸ばししている。

「別にそんな意味で言ったわけじゃないんだけどね。まあ、いいや。でも、ボクは嫌いじゃないよ。キミの部屋は」

そう言っつてシユヴァリエ・デオンは微笑む。男とも女とも美青年とも美少女ともとれる柔和な笑みだ。何時もと違い帽子をしていないデオンはますます性別が分からない、でもなぜかその笑顔にドキリとする俺がいた。

「まあ、こんなむさくるしい部屋でよければいつでも来てくれよ。それで今日はどうしたんだ？」

デオンの手に持つ袋からある程度予想は出来るのだが、とりあえず聞いておく。

「ボクが来る理由なんていつも通りさ。今日はあの聖女と魔女がいないでね、ゆっくりキミと語り合おうと思っただよ」

そう言っつてに持っていた袋から瓶を二つ取り出す。

「何時も通りワインとそしてキミ用に持ってきたラム酒さ。今日は一段と寒いし飲んで温まろうよ」

魅力的な笑みを浮かべながらそうデオンは言うのだった。

「そう言えば気になっていたんだけど」

「ん？　どうかしたのかい？」

俺はラム酒をデオンは赤ワインを、それぞれコップ四杯ほど飲んだ時だった。ふと、思っていたことを聞いてみることにした。

「デオンは何時もジャンヌ達がいらない時に来るがどうやってアイツラの予定を把握しているんだ？」

デオンがこうして俺の部屋に呑みに来ることはこれが初めてではない。今まで幾度とこうして俺の部屋を訪れている。そして、そのタイミングは毎回ジャンヌ達が二人ともレイシフトでない時だった。

「キミも知っているだろう、ボクの経歴は」

「フランスのスパイだったってことくらいはな」

「そう、つまり情報を集めることは得意中の得意だったことさ。ちなみにキミも知っていると思うけど、今日あの二人は種火集めにマスターと一緒に出掛けている。終わるのはどれだけ早くても夜の九時を超えるだろう。だから、それまではキミを独り占めできるってわけだよ」

「さすが、元スパイってわけだ」

「まあ、そういうことだよ。それにしても少し酔ってきたかな」

頬を少しだけ赤く染めながらデオンは言う。服のボタンを上から二つほど開けた。

「何だか暑くなってきたよ」

そうして手で胸元を仰ぐようにパタパタと右手を動かす。純白の胸肌がチラリと見えて、思わず目を背けた。

「うふふふふふ。キミは初心だね。そんなに見たいならじっくり見ればいいのに……。キミにならボクは全てを見せてもいいよ」

「そう、男の子をからかうもんじやないぞ。それよりも、暑いのなら暖房の温度を下げようか?」

「いや、そこまではないよ。キミの方は暑くないのかい?」

そうデオンに言われて気付いた。意識すると体が内側から火照ってきていることに……。

——そう言われれば何だか暑くなって来たな。

「そう言われれば俺も何だか暑くなって来たよ。とりあえず暖房の温度下げるな」

壁に掛かっているエアコンのリモコンを取ろうと立ち上がった時だった。急に体がふらつき倒れそうになる。

「——おっと、大丈夫かい?」

「すまん、助かった。ありがとう」

バランスを崩した俺はデオンに抱きかかえるようにして助けられた。デオンの柔らかい体の感覚がやけに印象的だ。

「少しペースが早すぎたのかもしれないね。とりあえず、ボクの横に座りなよ」

——あれ、そんなふうらつくまで飲んだかな。おかしいな普段ならまだまだいけるはずなのに。

そんな疑問を半ば朦朧とする脳内で思いながらデオンの誘導のままベッドに腰を掛ける。

「すまない、デオン。本当に助かる」

「キミとボクとの仲じゃないか、気にしないでくれよ」

デオンも酔っているのだろうか先ほどよりもさらに顔を朱に染めて微笑む。

「ありがとうな、お前みたいな友人を持って俺は嬉しいよ」

俺の言葉にデオンは、小さくつぶやくように口を開いた。

「……やっぱりキミはそういう奴なんだね」

その言葉は半ば意識が朦朧としている俺には届かなかった。

「何か言ったか?」

「ううん、何でもないよ。それよりも……随分酔っているようだけど大丈夫かい?」

デオンは俺の問いかけに首を一度振ると顔をグツと乗り出す様に近づける。その距離は目と鼻の先と言っても距離だった。

「あ、ああ、大丈夫だ。普段はこれくらい平気で飲めるから多分すぐによくなると思う」

整った顔が眼前一杯に広がったために思わずしどろもどろになった俺の内心何て露にも知らないデオンは息の触れ合う近さを保ったまま、

「本当に？ キミは何時も無茶をするからね」

「あ、ああ！ 本当に本当に大丈夫だ」

——何かがおかしい。

先ほどから何時もと酔っている感覚が違う。何というか浮いているような、何も考えられなくなるようなそんな感覚だ。

「そうか、キミがそういうのなら大丈夫だろう」

デオンが笑う。そこらの芸能人や女優よりも遥かに整った顔を持つデオン。

大きくはだけた胸元に朱に染まった頬——視線が逸らせなくなる。

——あれ、デオンってこんな良い匂いしたんだっけ？

まるで花、そうこれは白百合の花のような匂いが鼻孔をくすぐる。

脳みそが溶け出しそうな感覚に陥る。

「どうかしたのかい？ 辛そうだよ」

デオンはいつも通りの優しく魅力的な笑みを浮かべながら俺をそっと抱きしめた。

柔らかくて温かい感覚が全身を包む。白百合の香りが鼻孔を犯す。

——何も考えることが出来ない。

「うふふふ。今にもとろけそうな顔をしているよ。うん、それでいいんだ。そのまま快樂に身を落とせば……」

「な……な、何を、いつて……」

「ボクが男か女かどうか、それはキミがこのままベッドに押し倒せば分かる事さ」

——そいつの言葉は魔法のように、そして呪いのように俺を蝕む。なにもわからない。なにもかんがえられない。

「キミの周りにはあの聖処女と面倒くさい魔女しかいないから、相当溜まっていくんじゃないかい？——ボクにその欲望を吐き出してみないかい？ キミの全てをボクは——シユヴァリエ・デオンは受け入れよう」

——おれは、いったいどうすればいいんだ？

——バタン！

そんな時だった。大きな音を立てて扉が開かれた。

その音と共に覚醒する意識。

「このオルタ様に掛ければ種火集め何てすぐに終わるのよ！ さあ、私を褒めたたえなさい！」

——あれ、俺いままで何していたんだっけ？

一気に覚醒した意識で音の方角を見れば、黒い衣装に身を包んだジャンヌオルタが扉を開け放った姿で立っていた。勿論言うまでも無く正規の扉ではない方だ。

「あれ、何で俺ベッドに座っているんだ？」

横を向けば体温が伝わる位置に友人、デオンがいた。

——ああ、そう言えば、デオンと飲もうと話をして飲んでたんだっけ？

それにしても途中からの記憶がない。感じる限りそこまで酔ってはいないんだけどなあ……。

そして気付いた。

今の俺の状況を……。

ベッドにて俺とデオンはお互いの体が触れ合う距離に座っている。そんな状況をオルタが見ればどうなるか。

「——ツチ。まさか、ここまでいって邪魔が入るなんて。竜の魔女の戦闘能力を舐めてたか」

そんな友人の声が聞こえないほど俺は焦っていた。

——まずいこれは非常にまずい。

ギギギと顔を再びオルタに向ければ、

「これは一体どういうことかしら？」

満面の笑みのオルタがいた。ただし言うまでも無く目は笑ってい

ない。

「——すまないがボクは急用を思い出した。また明日会おう！」

「逃がすと思ってるの!? シュヴァリエ・デオン！ 今日こそ、塵一つ残さず灰にしてやるわ！」

バツと勢いよく扉に走るデオンにオルタは、

「おい馬鹿や——」

止める暇はなかった。

「——これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮……『吼え立てよ、我が憤怒』！」

復讐に染まった憎悪の炎が対象を焼き尽くさんとする。

「——つて、これ俺も対象に入ってるのか!？」

「当たり前でしょ！ 何時も何時もあの泥棒猫にそそのかさされるアンタが悪いんだわ！ 反省しなさい！」

「いや、別に俺とデオンはただの友人関係だつて！」

「うるさい！ うるさい！ うるさい！うるさい!!」

「うわわわわわ！ 燃えてるつて本当に燃えてるつて！」

こうしてある冬のある日俺の部屋は業火の炎に焦がされることになった。きつと、マスターが来るのが後数秒遅かったら半焼ではなく全焼していたに違いない。

ちなみにデオンの奴はちやつかり逃げ切っており、被害の一つも受けていないのはもはや言うまでもない。

### その三 ジャンヌ編

それはある冬の午前中のことだった。

「うふふふ……」

カルデアの俺に宛がわれた部屋にてソイツは炬燵に入りながら楽し気に笑う。白いその手には綺麗に剥かれたミカンが一つ。

昔から果物が好きだったソイツは朝からパクパクと俺の部屋に置いてあつたミカンを食べていた。

「どうしたんだ？ 急に笑い始めて」

そんな彼女の対面に座り、入れたばかりの熱いお茶を啜りながら聞いてみる。

——ああ、やっぱり冬には熱い緑茶が美味しい。

フランス的にはここで紅茶を飲むのが正解なのだろうが、生憎炬燵に合う飲み物と言えば古今東西、熱い緑茶か、日本酒の熱燗だと相場が決まっているのだ。俺もそれに習い炬燵で飲むなら紅茶よりも、緑茶だ。ちなみにそれは目の前に座る彼女も同じらしく、彼女の前には湯気が上がっている湯呑があつた。

「いや、何だか楽しいね」

彼女はそう言うで一房ミカンを口に運び更に笑った。何だかよく分からんが楽しそうで何よりだ。

「楽しいも何もただ自室でのんびりしているだけだろ」

先週末に少しだけ模様替えした我が部屋だが、基本的には相変わらずどこか殺風景な印象を受ける。そんな部屋の中で朝から俺と彼女がやっていることと言えば、炬燵に入りながら熱いお茶を啜り、時たまミカンをつまみ、そして何のためにもならない雑談をしているだけだった。

ちなみに、ここにもう一人の彼女、黒い方のオルタがいない理由は、先日考案された種火集めメンバーくじ引きで選ばれたからだ。きつと、今頃はブツブツ言いながらも種火集めに奮闘しているころだろう。ああ、そう言えば種火集めで思い出しが、今日のメンバーにはデオンもいるんだよな……。オルタとデオンが一緒って色々大丈夫

か……？

まあ、昔から喧嘩するほど仲が良いと言うし、大丈夫だろ……多分。

「うん、それがいいんだよ」

そう話す彼女の笑みは柔らかく優しいものだった。普段と同じ笑みでも今の彼女の服装のせいでもどこか違う印象を受ける。

今の彼女の服装は、何時もの服装とは違い白いセーターと茶色のズボンだ。流石に戦闘でもないのにあんな仰々しいと言うか華々しいと言うか、何と言うかまあとりあえず、あの白い衣装を着ることはない。基本的にこういうレイシフトも何もない日というのは気軽にカジュアルな服を着ていることが多かったりする。

そんな彼女の服装のせいで、今の彼女からは聖女というにはどこか神秘さが欠けているような印象を感じられた。どちらかといえば、聖女よりも村娘という言葉が今の彼女には当てはまるだろう。

もしかしたら、彼女があのまま聖女にならなかったとすれば、こんな女性に成長したのかもしれない。

まあ、村娘のような雰囲気といっても彼女の美貌は何を着ても目立つもので、村娘というよりか芸能人と言った方が正しいのかもしれないけど。

「そういうものか？」

「うん、そういうものだよ。お兄ちゃんが戦争に行った日からこんな風に二人きりでのんびりと出来る時間はなかったし」

「そっか、確かにそうだよな」

思い返せばそうだった。俺がドンレミの村を出た時から、俺と彼女が二人きりでのんびりと話す機会はなかった。俺が村を出て戦争に向かった後、その次にジャンヌと話すことが出来たのは、処刑される時だったし、その後再び顔を合わせた時は特異点やら、竜の魔女やらで世界滅亡の危機の真っ最中で、とても暢気に雑談している場合じゃなかった。

そう言われれば、確かにこうして彼女とのんびりお茶でも啜りながら話すのは相当ぶりだ。

——何だか、昔に戻ったみたいだな

「うん、何だか昔に戻ったみたいだよ」

——何だ、考えていることは同じか。

思わず笑みが零れた。

「——？」

頭にハテナマークを浮かべている彼女に笑いかける。

「いや、俺もちょうど同じことを思っていたんだよ。何だか、昔に、そうあのドンレミの村にいた時と同じ感じだなってさ」

もちろん、ドンレミの村には炬燵も緑茶もない。

でもきつと——。

「そうだね——戦争も何もなくしてお兄ちゃんも私もあの村にずっといたらこんな雰囲気だったのか？」

——もしもの話だ。もしも、あの時、フランスとイングランドとが戦争せず、そして世界が平和だったのなら、俺とジャンヌはドンレミの村でこんな感じになっていたに違いない。

「多分な」

そう言つて、俺は熱い緑茶を一口啜る。

「ああ、そう言えばお茶で思い出したけど、今度マリーさんがフランス組でお茶会しようって言ってたよ。お兄ちゃんも是非だって！」

「そうか。ん？ でも俺ってフランス組に入るのか？」

「え？ だって、ドンレミの村出身でしょ？ 英霊としてもフランスよりの英霊だし」

「いや、出身が何処かって言われれば多分、冬木だから日本に……いや、その辺りどうなるんだろ？」

聖女との何気ない話はまだまだ続くのだった。

「——お兄ちゃん、今日お昼どうするか決まってる？」  
のんびりと何気ない雑談を続けていた時だった。ふと、彼女はそう言った。

時計の針はもうすぐで十二時を指す。お昼時だ。

「いや、決まってるじゃないが、とりあえずいつも通り食堂で食べるつもりだけだ」

「そう、じゃあ予定はないんだね」

「まあ、そうなるな」

——じゃあ、さ。

そう彼女は呟くと、

「今日は私がお昼作るから一緒にこの部屋で食べようよ」

そう続けるのだった。

「料理？」

「うん、料理」

俺の問いかけに彼女は是と頷く。

「いや、それは構わないが、材料あったかな？」

食堂に行けば飯は食えるからわざわざ作るのも面倒だし、それにエミヤの飯は美味い。そんなんだから、普段あまり部屋では料理をしな  
いたため、冷蔵庫に材料が入っていない可能性は大いにある。つまり用  
に少しならあると思うんだけど、料理をつくるとなると少し心もとな  
いし。

「それなら大丈夫、昨日エミヤさんに材料分けて貰ってるから！」

彼女はそう言うのと炬燵から立ち上がる。

「材料は持つてくるからキッチン借りるよ」

「それは構わないが、手間じゃないか？」

「いいのいいの私が作りたいだけなんだから！ お兄ちゃんはお茶でも啜りながらのんびり待っててよ！」

そう言うのと彼女は扉の向こうに消えた。あ、これは言うまでないかも知れないが、その扉というのは、彼女の部屋に直通で行ける扉の方  
な。相も変わらず俺の部屋には扉が三つある謎の現象が続いていた。

もう最近はこの扉が三つある部屋にも慣れつつある。まさか、これ以上増えたりいしないよな、な？

彼女が食材を袋に入れて俺の部屋に帰ってくるのはそれから直ぐ後の事だった。

そうして数十分後、炬燵の上には彼女の作った昼食が並んでいた。

「まさかフランスの料理じゃなくて和食が出てくるとは」

美味しそうに湯気の立つそれらは和食。しかも、コテコテの。

味噌汁にご飯、そして焼き魚につけもの、そしておひたし。

一体誰に教えて貰ったというのだろうか。

そんな疑問を浮かべていると、

「えっへん！ 凄いでしょ！ 実はエミヤさんからちよつとずつ教えて貰っていたんだ！ 味もエミヤ印の保証済み！ 自信あるよ！ さあ、食べて見て！」

そう彼女は誇らしげに胸を張る。普段と違い白いセーターというカジュアルな服装の今の彼女が胸を張ると、強調されるところが強調されて目のやり場に困る。

気恥ずかしくなったため、視線を料理に戻せば、確かにどれもこれもが美味しそうだった。

これなら自信があるのも窺える。

「そうか、じゃあ早速食べるか」

「うん」

「いただきます」

二人で合掌。

まずは味噌汁を一口。

——うん、美味しい。あ、具はワカメと豆腐か。

「どう美味しい?」

「ああ、とても美味しいよ」

手際もよかつたし、きつと相当練習したんだらうな。

「そっか、よかつたあ!」

俺の言葉に彼女は安堵の笑みを浮かべる。どうやら言葉では自信たつぷりに話していたが、その実内心では心配をしていたらしい。

「ああ、これなら毎日でも作って欲しいくらいだ」

「——え? 毎日!? それって、、え? え?」

そんな俺の何気ない言葉に彼女はアワアワと顔を赤く染めて狼狽える。普段は真っ白な彼女の肌が一瞬で熟れたトマトのように紅く染まる。

「——これってあれだよ。私の味噌汁を毎日飲みたいってことだよ。ね! エミヤさんが言ってたもんね! 日本人の告白には毎日、俺に味噌汁を作ってくれないか、という言葉があるって! じゃあ、やっぱりこれってそういうことでもいいんだよね!? ね!」

何があつたのかよく分からんが暴走し早口で何かよく分からんことを言い始めたソイツに、

「何言っているのか分からないが、このレベルの味噌汁を作れるのなら、食堂で出しても毎日誰か喜んで飲んでくれると思うぞ。エミヤのレベルとそんな色ないし、この味噌汁」

——特に日本人サーヴァント多いし、ここ。朝食で和食出せば人気になれるかもな。

そう付け加える。

「え?」

急に素面に戻つた彼女。

「お兄ちゃんさっきの言葉って?」

「さっきの言葉って?」

「私の味噌汁が毎日作って欲しいとかいう」

「ああ、あれか、食堂のメニューにあつたら飲みたいなあつて話だよ。

きっと、他のサーヴァントも気に入ってくれると思うぞ。きっと毎日食堂でだしても誰か飲んでくれると思うぞ」

聖女が作る和食朝食セット、なんか秋葉辺りで売れば売り切れ間違いないのネーミングだな。

「お兄ちゃんは？」

「いや、まあ食堂にあつたら飲むけど、和食ばかりだと飽きるしな。それに味噌汁くらい自分で作れる」

そう言つて、ご飯を一口。うん、美味しい美味しい。

「お、お——」

彼女は急に箸を置くと肩を震わせる。

「ん？」

「——お兄ちゃんのバカアああああああ!!」

そして急にそう叫ぶのだった。

最後に、彼女の料理は全て美味だったとだけ記しておこう。

そして、夜。食堂にてエミヤの作ったご飯に舌鼓を打った帰り。

「お兄ちゃん」

場所は俺の部屋の前。時刻は、午後八時をすでに回っていた。

「うん？」

自室の扉の前で彼女は立ちどまった。

「また、明日っていいね！」

彼女はふとそう言った。

——また、明日。

あのドンレミの村から旅立ってから俺たちには無縁の言葉。使うことが出来なかった言葉。久しく俺と彼女の間では使われることの



「せ、先輩、気を確かに！」

## その2

——幸せとは何か。

それはある昼下がりの事だった。ジャンヌはふと、そんなことを考えた。何故そんなことを考え始めたのか、それはジャンヌにも分からなかった。何となく思いついたのがそれだった。いつも通りのバケツ一杯の青いペンキを空というキャンパスにぶちまけた様な青空の下、ジャンヌは立ちどまり、考えた。

空には燦燦と輝く八月の太陽が浮かび、その日光を遮ることなく受け続けているジャンヌの額には少なくない量の汗が見てとれたが、いつも外で遊び回っているジャンヌにとっては気にならないことだった。熱中症やら脱水症状やらは何時も外で遊んでいるジャンヌには心配のいらぬことだ。

そして、考える。幸せとは何か。

——美味しいものを食べた時とかかな……。

果物やお菓子が好きなジャンヌは家でたまに出てくるブドウなどの果物や遊びに行った先で出てくる甘いお菓子などを食べることが好きだった。

好きな物を食べる。うん、美味しくない物を食べるよりも、美味しいものを食べる方が幸せだ。だから、きつと美味しいものを食べることに幸せなのだろう。

——でも。

と、ジャンヌは考える。

——お兄ちゃんが言うには私は考える時に後少しだけ考えることが足りないらしいから……。

彼女が言うお兄ちゃんはジャンヌの家の近所に住む黒髪の青年のことだった。どこか、この村の人達とは違う雰囲気と顔立ちを持った青年は面倒見がよくジャンヌを含めたこのドンレミの村の子供たちの兄的な存在だった。そして、それと同時にジャンヌに勉強を教える人でもあった。

その青年曰く、ジャンヌは少しだけ考えが端的らしい。

そんな指摘をいつも貰っていたジャンヌはもう少しだけ、幸せについて考えることにした。

——確かに美味しいものを食べている時は幸せだけど……うーん、それ以外にも皆と遊んでいときとかも確かに楽しいし。

楽しいということは幸せだ。少なくとも楽しくないよりかはよっぽど幸せだ。毎日、楽しいことばかりだったら何て幸せなことだろう。村の子供たちと遊ぶのは楽しい、間違いなくそう言える。そして、家でのお手伝いやたまにあるお説教は楽しくない、嫌いだ。

——と言うことは、毎日みんなと遊んで美味しいものを食べるのが幸せ？

そしてジャンヌは考える。

毎日、怒られもせずにジャンヌの好きな物を好きなだけ食べられる生活を。

——うん、悪くない。間違いなく幸せだ。

そんな夢のような生活が出来れば間違いなくジャンヌは幸せだろう。そこに青年も加えればそれはもう言うまでもない。

うんうん。

そう人知れず八月の青空の下、ジャンヌが納得をしていると、目の前を見慣れた横顔が通りがかった。毎日のように見るその顔をジャンヌが見間違えるはずもない。

「お兄ちゃん！」

ジャンヌのその言葉に頭には帽子を被り、鍬を肩に掛けていた青年は顔を向けた。

「おう、ガキんちよか」

そして見慣れた優しい笑み。ジャンヌはその笑顔が大好きだった。思わず緩みそうになる顔をジャンヌは抑える。彼の笑顔は好きだし、彼のことは大好きだ。でも、彼のジャンヌを子供扱いする態度は嫌いだった。どれだけオシヤレをしても背伸びをしても彼はジャンヌの事をガキんちよと言って相手にしなかった。

「むむ！ 私はガキんちよじゃないもん！ レデイだもん！」

「そうかそうか、それは悪かった。で、今日はどうしたんだ。こんな所で立ちどまって」

「うん、遊びに行こうと思ったんだけど、その前に少しだけ考え事を」「ふーん、そうか。それにしても今日は暑いから、そんな格好じゃ危ないぞ。これを被っていけ」

彼はそう言うと笑みを崩さず、左手で自分の帽子を取るとジャンヌの頭に被せた。青年の頭のサイズに合わせているため、ジャンヌではブカブカだ。直ぐにツバが斜めになった。更にツバが大きいため帽子を被るというよりも帽子に被られているような格好になっていた。

でも、ジャンヌはこの帽子を取ろうとは思わなかった。せつかく青年が被せてくれた帽子だし、何だかこの帽子を取りたくなかった。帽子を被り幾らか日光を遮っているはずなのにジャンヌには何故かさきほどよりも少しだけ体が熱くなったように感じた。それが何故なのかは分からない。

「ありがとう、お兄ちゃん」

「どういたしまして」

彼は左手でポンポンと帽子の上からジャンヌの頭を撫でた。ジャンヌはこの手が好きだった。小さい時から畑仕事をして豆がつぶれ固くなったその手が、何よりも好きだった。

「ねえ、お兄ちゃん。一つ聞いてもいい？」

「ん、なんだ？ 俺に答えられることなら何でもいいぞ」

ジャンヌは先ほどまで考えていたことを彼に聞くことにした。勉強を教えて貰い始めて以来、いやそれ以前から彼はジャンヌが知りたいいことを全て知っていた。それこそ、ジャンヌは村の大人たちにも負けないくらい頭が良いと思っっている。

「——幸せって何かな？」

ジャンヌの言葉を聞き、彼は顎に手をやり少しだけ考えた。しかし、それはすぐに終わり彼はいつも通りの優しい口調で話し出す。

「じゃあ、君はどう思った？」

彼は何時もそうだった。ジャンヌが何かを質問するとき、必ず彼は

先にジャンヌの考えを聞いた。それが合っている間違っていても必ずジャンヌの考えから聞くのが彼だった。

「私は、毎日美味しいものを食べて、そしてお兄ちゃんや皆と遊ぶことが出来たら幸せだと思った」

「なるほど」

彼はそう言うとき少し言葉を止めて考え始めた。今度は少しだけ長かった。口に出す言葉を色々と考えて推敲しているように見えた。

暫く立って漸く彼は口を開いた。

「確かに、そんな生活は楽しくて幸せだろうね。間違いなく幸せの一つの形でもある。でも、それは刹那的な幸せだよ」

「ん？ それってどういう事？」

「これは難しい話だからね、今はまだ理解できないかもしれないけど、こういうことは誠実に伝えておくべきだと思うからありのまま俺の考えを伝えるね」

「幸せっていうのは概念だからね。だから、その反対の言葉を実感できないと幸せって分からなくなるんだ。例えば、毎日毎日遊んで、好きなものばかりを食べていると楽しいということや、美味しいということがどういふことか分からなくなってくるんだ。意味が薄れていくんだよ。楽しいと言う言葉を実感するためには反対に辛いと言うことを体験しないとイケないし、何かを食べて美味しいと思う為には、それとは逆に何か美味しくないとイケない。だから、幸せっていう概念は何時だって不幸という言葉とともにあるんだ。まあ、これは俺の考えだから、他の人にとっての幸せはまた違う。俺には俺の幸せがあって、君には君の幸せがある。幸せは個人差があるから、君がそれを幸せと思うのならそれでいいと思うよ」

ジャンヌは話の全部は理解できなかったが、彼の伝えたいことは分かった。

「じゃあ、お兄ちゃんは何が幸せって何？」

「俺にとっての幸せは——だよ」

「それってどういうこと？」

「ああ、すまんすまん。分かりにくかったな。じゃあこう言おう。俺はこうして毎日このドンレミの村で畑仕事をしながら暮らすのが幸せだってね。辛いことも楽しいこともひっくるめて、こういう何気ない日常生活こそが幸せなのさ」

彼の答えに、ジャンヌは

「えー、そうかなあー」

と少し不満げだった。八月の青空の下、確かにこんな話があったのだった。

「——ん」

「お、起きたか」

目を覚ますと目の前には見慣れた顔。

「あれ、何で私はここに？」

「いや、そんなことを俺に言われてもな、お前が勝手に炬燵で寝始めたんだろ」

困ったような顔でそう言われ思い出した。

——私、お兄ちゃん部屋の炬燵に入りながら話していて、それでいつの間にもうとうとして……。

よくみれば上着まで掛けられている。男性用のジャンヌには大きいものだ。

「そっか、私あのまま……。上着ありがとう」

「別に気にするな。風邪でも引かれたらことだしな」

部屋の主はそう言って笑う。優しい笑みだった。

「私、どれくらい寝てた？」

「うーん、一時間くらいかな」

部屋の壁に掛けられている飾り気のない時計を見れば午後三時過ぎを示していた。

「ごめんね、急に寝ちゃって」

「いや、気にするな。毎日レイシフト続きで疲れてたんだろうしね。なんか幸せそうな顔してたけど、良い夢でも見たか？」

そう言われて思い出す。

「全部は思い出せないけど、昔の夢を見ていたような気がする。ドンレミの村で過ごしたあの時の……」

どんな夢かはもう思い出せない。でも、思い出せないと言うことは幸せな夢だったんだろう。そして、ジャンヌはふと、心に浮かんだ言葉の口に出す。

「——ねえ、お兄ちゃん。今って、幸せだね」

なんでそんな言葉が出たのかジャンヌ自身でも分からなかった。毎日楽しいことばかりでない。レイシフトで強敵と戦うことも多い。でも、何故かそのセリフはストーンとジャンヌの心に落ちた。

そんなジャンヌのいきなりの言葉に青年は少しだけ戸惑いながらも、

「ああ、そうだな」

そう返すのだった。

それからすぐにジャンヌが青年に寝顔を見られていたことに気が付き、赤面させることになるのは別の話であり、そしてその赤面して床を転げまわるジャンヌの奇行の理由が分からずに青年が頭を悩ますのはもっと別の話だ。

女心と秋の空。

青年が女心を理解するのはまだ先のことになりそうだ。

## ある春の日の話

それは、人類最後のマスターによって世界が救われた後の物語。世界の危機は過ぎ去り、ハッピーエンドで幕を閉じた後にあつたかもしれない、そんな可能性の物語。

「……え？ 俺とジャンヌの話を知りたい？」

いきなり投げかけられたその言葉に思わずそう返した。

それはある晴れた春の日の出来事だった。人類悪魔神王ゲーティアが人類最後の希望である藤丸立香によって倒され、人類の危機が過ぎ去ったのは今ではもう一週間以上前の話になる。今では大混乱が起こっていた外もどうやら徐々に落ち着きを取り戻してきたようで、カルデアに設置されたテレビでは連日のように一年間の空白を取り戻そうと努力する人々の様子がニュースで放送されていた。勿論、その混乱はカルデアにも影響を及ぼしたが、それでも外に比べれば少ないもので、三日もすればすっかり落ち着きを取り戻し、平常運転に戻っていた

外がどうなつていようと、表に出る訳にはいかないサーヴァント達はとりあえず色々と処分が決まるまでは各自思い思いにカルデアの中で過ごしていた。まあ、要するに世界は平和になつてもこのカルデアの中の生活はレイシフトが無くなったことを除き、そこまで変わらないという訳だ。

「うん、そうだね。キミとジャンヌダルクの話を知りたい」

ティーカップに入った紅茶を上品な仕草で一口飲むと、ソイツは微笑んだ。美青年にも、美少女にも見える中世的な魅力をもったソイツは、もうかれこれ長い付き合いになる友人だ。名前は、シュヴァリエ・デオン。今日の二人だけのお茶会の主催者だ。ちなみにジャンヌとオルタの二人はいない。その理由は、ジャンヌはマリーが開催してい

るお茶会に出席しており、オルタの方は何か用事があると云って何処かに出かけたからだ。

「でも、お前あのフランスの時に竜の魔女から聞いたんじゃないの？」

間取りは同じはずなのに、置かれている家具やらが違うせいでデオンの私室は俺の部屋とは全く違って見えた。

「ああ、確かに聞いたのは聞いたけど、大まかな話しか聞いていないからね。あの時は時間もなかったし、ボク自身も彼女のサーヴァントだったしで、細かい話は聞けていないんだよ」

「へえ、そうだったのか……でも、あまり面白い話じゃないぞ」

——歴史に残らなかつた物語であり、世界に消された物語。

——人々の記憶から消され、誰も覚えていない。俺と彼女だけの物語。

「それでも構わないよ。ボクは聞きたいんだ。キミとジャンヌダルクの物語の全てを」

「うーん……」

「キミがどうしても話す気がないのなら無理には聞かないが……」

そう云ってデオンは優しく微笑んだ。

「確かに恥ずかしい話だけど……まあいつか、デオンには色々世話になってるしな」

でも、本当につまらない話だぞ、と付け加える。

その忠告にデオンはそれでも構わないよ、と笑う。本当に笑顔が魅力的な奴だ。

俺と彼女の話は、別に壮大な冒険記でも、パツと華のある大恋愛話でもない。このカルデアにいる他のサーヴァント達の物語の方がよっぽど華があり面白く、壮大な話に違いない。だって、彼らの中には本物英雄も勇者も、そして神様だっているのだから……。

でも、デオンは俺の話が聞きたいと言った。大方、俺をここに招いたのもこの話を聞かためだろう。

友人の頼みだ。なら、たまには話すのも悪くない。

「そうだな、まずはどこから話そうか……うん、そうだな」

『なあ、少し話を聞いてくれないか——』

こうして俺はぼつぼつと語り始める。

——別に壮大な冒険記でも、パツと華のある大恋愛話でもない。歴史に残らなかった物語を。

——どうしようもなく冴えない青年が、どうしようもなく美しい聖女に、どうしようもないくらい恋をする物語を。

「ねえ、ジャンヌ、一つ聞きたいことがあるのだけど……」

そう言つてマリーはカップをソーサーの上に置くと私を見た。穢れを知らない青い瞳と視線が交差する。

「はい、なんでしよう?」

小さく首を傾げた私にマリーは笑いかける。

「ずっと気になっていたことがあったの。ジャンヌに聞きたくて聞きたくて仕方なかったことが……」

——私に聞きたい事? なんだろう。

そんな疑問を自分に投げかけて見るが、答えはすぐには出なかった。

内心でハテナマークを浮かべている私の内情を知つてか知らずかマリーはマイペースに話を続ける。

「アナタとあの悪魔の隊長さんとの大恋愛話を聞いて思ったのよ」

「私と師匠の……?」

私のそのつぶやきに、

「ええ、そうよ。先日、貴女と隊長さんのお話を聞いて以来、ずっと気になつてたの」

私が、お兄ちゃんと私の話をマリーに話したのは今から三日ほど前の事だった。女子会と称したお茶会に参加した時に、参加した女性

サーヴァント達の前で半ば無理やり話をさせられたのだった。話した直後の反応はそれはすごいもので、皆から茶化されたのは記憶に新しい。そして、思い返せばあんな恥ずかしい話をよく人前で話したものだ、顔が赤くなる。

「何が気になったんですか？」

「ごほん、と一つ咳ばらいをして、顔の赤みを誤魔化すとマリーに問いかける。

マリーは私の問いかけにおもむろに、ゆっくりと口を開いた。

「——ねえ、ジャンヌ？ 今の貴方は、その隊長さんとお付き合いされているのかしら？」

「ああ、なんだ。そんなことか。」

「いいえ、そんな関係ではないですよ。私と師匠は」

「——答えはすぐに出た。」

「それで、キミとジャンヌは今現在はどうなんだい？ 付き合っているのかい？」

「俺のつまらん自分語りが終わりに、しばらく会話を挟んだのちだった。デオンはこんなことを聞いてきた。その質問に紅茶を飲みながら俺は答える。」

「いや、デオンも見ての通りだ。俺とジャンヌはそんな関係じゃない」

「やっぱりか……。でも、どうしてなんだい？ 話を聞くにキミは死ぬ間際、彼女に告白をして、彼女もそれに応えたじゃないか……。こうして再会できたのだからお互いに今こそ恋人になるべきでは？」

デオンはここから疑問に思っているかのように首を傾げながら聞いてくる。

「ああ、そんなことか。だから、さっきの話でも言ったように——」

「——終わったんだ。あの物語は……。俺と彼女のあのどうしようもない物語はあの日あの広場で、火に包まれてた時に終わったんだ」

炎によつて物語は灰になり、風と共にどこかに消えた。もう、俺と彼女の物語はどこにもない。

——確かにあった物語は、確かに終わったんだ。

「終わったとしても、今キミはこうしてカルデアに存在してここには彼女もいるじゃないか？」

「確かにそうだな。まあ、でも俺たちはあのフランスの地で死んだ。人間としての俺と彼女の物語はあそこで終り。そして、その終わりに俺も彼女も満足している。だから、死んだ後にこうして何の因果か顔を合わせてもあの時のようにはいかないんだよ」

それに今では、オルタもいるしな、そう付け加えて笑う。

そう一度完結した物語に続きはない。また新しい物語が紡がれるだけだ。そして、その新しい物語で俺と彼女が恋に落ちる可能性は……。

「じゃあ、もしも……。もしもの話だが」

デオンはさらに続ける。

「——聖女がこのカルデアで新しい人と恋に落ちて、そして恋人同士になってもキミはいいって言うのかい？」

「ねえ、ジャンヌ。貴女はさきほど、私と師匠の物語はあのフランスの広場で終わったと言ったわよね？」

上品な動きでカップに口をつけた後、マリーはこう言った。

「ええ、言いましたよ」

「じゃあ、今の隊長さんが誰とお付き合いしても別に構わないってことかしら？」

優しいし面倒見も良いしで結構人気なのよ、隊長さんって、私も狙ってみようかしら、とマリーはウインクを一つ。その顔には冗談と本気が入り乱れていた。

「そうですね。彼がそれを選んだのでしたら、私はそれがいいです。きつと師匠も同じことを思っていると思います」

——お兄ちゃんがそれがいいなら、私もそれがいい。

今も昔も変わらない私の本心。そしてその気持ちはこれから先も変わることがない気持ち。

「それは本心かしら？」

マリーからのその問いかけに、私は大きく頷くとゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「ええ、構いません。でも、一つだけ付け加えたいことが在ります——」

「ジャンヌと俺以外の奴が恋人になる?」

「ああ、そうだ。あれだけの美貌を持つ聖女だ、カルデア内でも人気は高い。ひそかに狙っている奴も多いだろう。もしも、そんな奴らと彼女が恋仲になってもキミはいいのかい?」

そのデオンからの問いかけの答えは考えるまでもなかった。

「勿論、構わないよ。ジャンヌでもオルタでも彼女たちがその人を、もしくはそのサーヴァントを選んだのであれば俺はそれで構わない。多分だけど向こうも同じことを思っているんじゃないかな?」

何時の日にかに言った言葉——キミがそれいいなら、それでいい。きっと、ジャンヌもそしてオルタもその気持ちは変わらないだろう。

「本当にそれで構わないのかい?」

デオンからの確認の言葉に、ゆっくりりと、頷く。

「ああ、構わないよ。でも——」

例え、ジャンヌが誰と恋人になろうと、誰と夫婦になろうとも構わない。しかし、誰を選ぼうとも決して変わらないことがある。

デオンは少し緊張しながら目の前の彼から紡がれるセリフを待った。目の前に座る彼は紅茶を一口口に含むとゆっくりとしたおもむきで言葉を出す。

「ああ、構わないよ。でも俺は、——」

そこで一旦彼は言葉を区切った。彼はこれまでの会話で、聖女に自分以外の恋人が出来ても構わないと言っていた。それは即ち彼自身

にも今現在恋人がいないことを指す。

(もしかすれば、ボクにもチャンスが……)

——彼が言ったように、彼と聖女の物語が、あの壮大な恋物語が終わったものであるのなら、きつとチャンスがあるはずだ。

デオンはそう自分に言い聞かせる。

そんなデオンの内心を知ってか知らずか、目の前の彼はゆつくりと何時ものようにマイペースに、それでいて尚且つ真つ直ぐに言葉を続ける。

「——どんな恋人や、どんな夫よりも彼女の幸せを願っているよ」

そう言って笑う彼の笑顔は、今まで見たどんな表情よりも魅力に溢れていた。

——ああ……これは勝てないや。

デオンは目の前の人物に悟られないように小さく息を吐いた。春になって気温が上がり暖かくなった部屋の温度が今は少しだけ、心に沁みた。

鼻歌まじにマリーは手を動かす。その顔には喜色が強く見える。よほど機嫌がいいのか、軽やかな手つきで、乾かしたティーカップやソーサーを食器棚へと戻していく。

「でも、やっぱり、可愛いわねジャンヌって」

思い返すのはさきほどまで部屋にいた友人の顔。

そして、彼女との会話を思い出し、マリーは笑う。

「——どんな彼女よりも、どんな妻よりも、彼の幸せを願っています……ね」

高級感の溢れる部屋にマリーの笑い声が溢れかえった。

「よう、今から部屋に戻るのか？」

お茶会が終わり、デオンの部屋から自室へと戻っていた時だった。目の前の廊下を見慣れた後ろ姿が歩いていたので声を掛ける。

「あつ、お兄ちゃん。うん、そうだよ、今から部屋に戻るんだ。お兄ちゃんも？」

ジャンヌは俺の顔を見ると、柔らかい笑顔でほほ笑んだ。

「ああ、俺も部屋に戻るところだよ」

「そうなんだ。それじゃあ、一緒に戻ろうよ」

ジャンヌはそう言うのと俺と並んで歩き始める。お互いよく知った間柄なので歩幅を合わせるのにも苦労しない。

「ねえ、お兄ちゃん、お茶会で何の話をしたの？」

その問いかけに少しだけ考えて、

「うーん、内緒だな」

「えー、何それ！」

「じゃあ、お前の方は、何の話をしたんだよ？」

俺の問いかけに、ジャンヌはうーん、と少し考えた後、

「内緒っ！」

そう言っただけ笑った。

「何だ、お前も内緒じゃないか」

そう言っただけ俺も笑う。

季節は春、出会いと別れの季節であり、始まりと終わりの季節だ。多くの新しい物語が始まる季節。

その多くの新しい物語の中に俺と彼女の物語があるのかどうか、それはまだ分からない……。

でも、俺は思う。

——願わくば、キミのこれからの物語に多くの幸があらんことを——

！。

横で幸せそうに微笑む彼女の幸福を静かに祈った。

## ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ編

「私は、お兄さんと同じ部屋がいいです。なので、自室はいりません！」

それは色々であったカルデアでのクリスマスが終わった翌日のことだった。

一人の少女がこんなことを言い始めた。

白い肌はまるで陶器のような透明感のある白で初雪を思い出させる色だった。髪は月光のように銀色に輝き、その長さは自身の身長と同じ程度に伸ばされていた。瞳は黄金色で、光の当たり具合によっては輝いて見えた。

白い肌に銀色の髪、そして金の瞳と言えば、どこかで見た様な容姿ではないだろうか？

少なくともこれを見ている人ならどこかで引っかけたはずだ。

そう、それもそのはず、彼女はあのジャンヌダルク・オルタの幼くなった姿なのだから――。

この少女の名は、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ。

かのジャンヌダルクオルタが幼くなった存在で色々あったクリスマスが終わった後にこのカルデアに改めてやってきた少女だった。年の頃は小学校中学年くらいか若しくはそれよりもまだ若いくらいだろうか、まだ幼さを残していた。詳しい歳は聞いていないがあなたが間違っていないと思う。

色々あったクリスマスってなんだよ？ そう思う人もいるかもしれないが、色々あったクリスマスについてここで語るには原稿用紙と時間が圧倒的に足りない為、悪いがまた今度報告させてもらいたい。

まあ、クリスマスのこととはともかくとして、少女は凜とした口調で冒頭の言葉を口にしたのだった。

「ダメです！ それは認められません！」

その言葉にいの一番に反応したのは俺の目の前に座っていたジャンヌだった。ちなみに席順は六人掛けのテーブルに三対三で向き合うように座っており、俺の向かいには右からジャンヌ、オルタ、ダヴィ

ンチの三人。そして、こちら側には俺、件の中心である ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ、その更に奥には人類最後のマスターの立香が座っていた。

「何を言い出すかと思えば、このちっこいのは……。誰がそんなこと認めるものですか」

ジャンヌの横に座っていたオルタが顔をしかめながら言う。普段ならあまり意見が合わない二人だが、今回の件については同じ考えを持っていてよかった。

「何ですか!? 私、聞きましたよ! カルデアは日々サーヴァントが増え続けていると! このままではいつか部屋が足りなくなってしまうかもしれません! だから、私はお兄さんと一緒に部屋で暮らすことによって部屋の数が足りなくなることを防ぐんです! ええ! カルデアの為です! 決して私自身が一緒に部屋で暮らしたいなんて思っていないんですからね!」

あまり芳しくないジャンヌとオルタの態度にもめげずジャンヌオルタリリイは言葉が続けた。その態度は堂々としており、まるで自分の意見が正論だと心から信じているのだろう。

しかし、その言葉も――

「却下です」

「却下に決まってるでしょ」

成長した自分自身からあっさりとは却下の烙印を押されることになった。

「なんでですか! どこからどう見ても論理的でロジカルなこの意見が何でダメなんですか!」

「どこが論理的なのよ。それにカルデアのまだまだ空きがあるわ。見た目は幼いとはいえ、サーヴァントとして存在しているのなら、一人部屋で自立した生活を送りなさい。それにもしも一人部屋が嫌だと言うのなら、彼の部屋ではなくて白い方の部屋と一緒に暮らせばいいわ。ええ、それが良いわ! 二人で住むには部屋が狭いと思うからあの部屋を引っ越して少し大きめの部屋で一緒に暮らすといいのよ。わざわざ異性である彼と一緒に住むよりも同性の方がいいでしょ?

倫理的にもね」

それがいいわね、とオルタは自分自身の意見に頷く。

「確かに一緒に暮らすのなら同性の方がいいという意見には同意を示しますが、しかし、それならば貴女と一緒に住めばいいではないですか？ 彼女は貴方が幼くなつたサーヴァントなんですから、きつと話も合うでしょうし」

オルタの言葉を受け、ジャンヌも言葉を返す。

「私としてはどちらも遠慮したいです。正しく成長した私と一緒に暮らすと色々と厳しそうですし……。成長した私の部屋は物が溢れますし……。それに色々と変なゲーム——」

とここまで、リリイが話した時だった。

「——少し黙りなさい。ガキンちよ。私の部屋についてこれ以上何か言ったら……。燃やし尽くすわよ？」

普段よりも二トーンは低い声と共に鋭い眼光がオルタからリリイに飛んで行った。その視線はまるで獲物を狩る鷹のように相手を射抜くものであり、戦闘時でも中々にお目にかかる事は出来ないものだった。そして、これはオルタが本気でキレている時の合図でもある。特異点の時ですらあまりお目に掛かれなかったものだ。

——そこまでして、隠したいもんでも部屋にあるのか？

生憎さまオルタの部屋にもジャンヌの部屋にもまだ一度も入ったことはないの二人の部屋に何かあるのかは知らないが、リリイの言葉を聞くにオルタの部屋は中々に凄いいことになっていそうだ。色々と言にならないと言っては嘘になるが、オルタのあの態度を見ていると藪を突いて出るのが、棒ではなく蛇だろうと思うので、ここはスルーしておくとする。君子危うきに近寄らずだ。

でも気になるのは気になるので、今度あいつが酔った時にも聞いてみようと思う。どうせ介抱するのは俺なのだし、その駄賃としてこれくらいの事は聞いても罰は当たらんだろう。部屋に行くわけでも部屋を勝手に見る訳でもないんだし。まあ、もしも人の住めないような魔境になっていそうだったら、ジャンヌと二人で強制的にでも片づけに行こうと思う。

「ひ、ひいひい」

オルタの脅しを受けたリリイは素早く椅子から立ち上がり俺の背中に隠れると顔だけをひよっこりとだして続ける。やっぱり怖いよなああの声とあの目で睨まれたら。俺だって怖い。

「お、脅しですか？ 権力には屈しませんよ！ と、とにかく、私はお兄さんと一緒の部屋で暮らします！」

プルプルと震えながらもリリイは言った。その目尻は涙が溜まっている。その様子を見てみると昔のことを思い出して少し笑いそうになった。そう言えばジャンヌは泣き虫だったよな。ドンレミの村ですぐに泣いていた少女のことを思い出す。

「まあ、オルタの部屋がどうなっているのか今は置いておいて……。師匠と一緒に住むのは認められません。第一に師匠も迷惑でしょう」

ここに來て漸く渦中の中心であった俺に話が回ってきた。今までも会話に口を挟もうと思っていたんだが、いかせんジャンヌ達三人でテンポよく話している物だから口を挟むタイミングが無かった。

「別に俺はリリイがか——」

別に俺自身はリリイと一緒にの部屋で暮らすことに抵抗はない。何といってもジャンヌ又幼い時の姿に似ているし、妹が増えたような感じだ。

だから、別に俺はリリイが構わないなら構わない。そう言うはずだった言葉は途中でかき消されてしまった。言葉の途中で俺の後ろに隠れていたリリイが大声を出したからだ。

「——大丈夫です！ お兄さんが迷惑だなんて思う訳ありません！ クリスマスの日にあれだけ私に優しくしてくれたんですから！ お兄さんだつてきつと私と暮らすことに賛成なはずです！」

「何を言いだすかと思えばそんなことを……彼が優しくしてくれたって？ ふん、当たり前じゃない。彼は誰に対してもそんな態度よ。だから、自分だけが特別だつてうぬぼれないことね」

リリイの言葉をオルタはまるで興味のないかのようにバツサリと切って捨てた。

「むう……。成長した私はきつと、クリスマス自分だけいなくてきつ

と拗ねているだけです」

「——何か言ったかしら？」

「——ひっ！ ま、また脅しですか!? 恐喝ですか!? でも、私は負けませんよ！ く、来るなら、き、き、来なさい！」

俺の背中に隠れ、プルプルと震えながらリリイは続ける。

そんなジャンヌ達三人の話し合いを立香とダウインチは紅茶を飲みながら微笑ましそうに見ている。どうやらあの二人はとつくの昔に意見を言うのを諦めて成り行きにことを進めていくことに決めたらしい。俺も出来ればわれ関せずのスタンスを取りたいのだが、思いつきり自分に関係のある事なのでそれも出来ない。

はあ、と内心でため息をつきながらも、俺の椅子の後ろにいるリリイに手を伸ばし、その頭を撫でてやる。

「お、お兄さん……」

「ほら、オルタもそんなに虐めてやるなよ。可愛そうじゃないか」

「べ、別に虐めている訳じゃ……それもこれも、その小生意気な小娘が悪いんだし」

小生意気な小娘って……一応お前が幼くなつた姿なんだけどなあ……。

まあ、口調にも棘はないし、きつと自分自身の幼い時の姿や言動を見て恥ずかしがっているだけに違いない。まあ、それは置いておいて、だ。

「それに俺はリリイが——」

またしても俺は言葉を最後まで言い切ることが出来なかった。リリイがいいなら構わない、と続くはずだった言葉は今度は目の前に座るジャンヌの声によってかき消された。

「とりあえず！ 師匠との同棲は私とオルタが認めません。どうしても一人部屋に不安があるのなら、狭くなりますが、私かオルタと一緒にの部屋に住むか、もしくはナーサリーとジャックの部屋に住むのかにしてください！」

俺の言葉をかき消してそう言い終えたジャンヌと目が合う。

——しばらく黙っておいて、お兄ちゃん！

透き通った碧眼はそう物語っていた。その目は戦闘時のそれ並みに真剣であり、思わずたじろいでしまいそうになった。

——オルタといいジャンヌといいなんでこんなにマジになってるんだ？ たかが部屋割くらいで。

内心ではそう思うが、それを口に出したら最後、事態の收拾がつかなくなる位は馬鹿な俺でも分かるのでここは黙っておいた方がよさそうだ。要らないことを言っただけでジャンヌとオルタから噛みつかれるのは御免だ。

「そうね、あのちびっ子達と一緒に部屋でいいんじゃないの？ 何でもクリスマスの際に仲良くなったんでしょ？」

ジャンヌの意見にオルタも頷く。カルデアのサーヴァント達は基本的に一人につき一部屋を与えられているのだが、例外というものも存在する。その内の一つがナーサリーライムとジャックザリッパーだ。二人ともサーヴァントには珍しく幼い少女と言うこととお互いに仲がいいことを考慮して二人で一部屋となっていた。ちなみに二人とも俺に懐いてくれていて、たまに一緒に遊んだり勉強を教えたりしている。まあ、その時の話もおいおい時間がある時に話そうと思う。

「た、確かにナーサリーともジャックとも仲が悪いわけじゃないですけど……」

「じゃあそれで決まりね！ 全く無駄な時間を取らせて……」

「で、でも！ それじゃあお兄さんと離れ離れに……！ うう！ 成長した私の馬鹿！」

「なっ!? 言うにことに欠いて馬鹿ですって!? この私が!? はんっ、私が馬鹿だと言うのならその聖女様は大馬鹿者でしょうね」  
「何ですって、オルタ？ 何で私が大馬鹿になるんですか？ これでも生前はシャルル七世に聡明だと褒められたこともあったんですよ！」

「それは貴方じゃなくて、彼の教育が良かっただけよ！ それにいくら彼の教育が良かったとしても貴女、まだ計算が苦手じゃない。計算が苦手な時点でどこも聡明じゃないわ。精神的に向上心のないもの

は馬鹿だ、彼の好きな作家はこう書いているわ。だから、貴女は大馬鹿なのよ」

「う……それを言うなら貴女だって一緒じゃないですか!」

痛い所を突かれたのか言葉が詰まったジャンヌに対してオルタは尚も続ける。

「はんつ、私は日々成長しているのよ。貴方と違って彼に時々教えて貰っているから、既に私のレベルは高校卒業レベルはあるわ」

「なっ!? それは本当ですか? お兄ちゃん!」

よほど衝撃を受けたのか立香やダヴィンチが目の前にも関わらずジャンヌは俺の呼び方を変えた。これは後で本人が後悔するパターンのような気がするがそれをここで言っても話は進まないためジャンヌの質問に大人しく応えることにする。

「まあ、本当だな」

それはある日の夜の事だった。俺の部屋を訪れたオルタから乞われたのが数学を教えてほしいと言うことだった。俺自身も特に断ること気軽な気持ちで引き受けた。初めは中学レベルの数学くらいまで教えればいだろうと軽く考えていたが、オルタのやる気は凄まじくすぐに中学レベルから高校レベルに上がりもう少して俺の教えられることは全て教え終える。初めは掛け算すら怪しかったと言うのに、今ではベクトル、数列、微分積分すら出来るようになった。このままのペースでいけば俺が抜かれるのも時間の問題だろう。問題を聞かれた時に答えられないのは流石に兄貴分として嫌なので俺もここらで誰かに数学を乞っておこうと思う。

「な、何時ですか! 何時の間に」

よっほどの衝撃だったのか机を一つバンと叩きジャンヌは身をこちらに乗り出す。

「い、いや、夜の話だけど……」

その勢いに少しばかりたじろぎながら応える。

「よ、夜ってあの部屋決めのルールでは……」

「はん、これだから模範回答しかできない聖女様は……。あの決まりでは八時以降に私の部屋から彼の部屋に向かう扉が使用できないだ

け。普通に正規の扉から訪れれば何の違反でもないわ」

「な、な、な……なんで言ってくれないんですか！ お兄ちゃん！」  
「ちよつと馬鹿やめろ！ 揺さぶるな！」

何をそんなに興奮しているのかは分からないが俺の胸元を掴んで激しくシエイクするのは止めてほしい。ポンポンとタツプの意味も込めて腕を叩くと漸くその動きは止まった。

「うう……。オルタにばかり負けていられません。お兄ちゃん、今度は私にも教えてください！」

「ああ、分かった。ジャンヌには美味しいもの作って貰ってお世話になってるからそのお返し代わりに何時でもいいぞ」

俺としては何気ないその言葉に――

「ちよつとそれはどういう事かしら？」

――今度はオルタが食いついた。

「何？ 貴方まさかこの白い奴の手料理を食べているの？」

「……ああ、たまに昼食とか作ってくれたりするんだよ。後は一緒に作ったりとか……」

「な、何ですって!?! ちよつと白いのそれはどういうことですか？」

「どうも何もお兄ちゃんが言っているままですけど……。レイシフトで貴女はいないことも多いですが」

「くっ！ 抜かったわ！ 私がない時を狙って……胃袋から掴みにいくなんて、流石オリジナル、汚い！ 汚いわ！」

「汚いなんて酷い言い方は止めて下さい。それに私はカルデアにきて鍛えた料理の腕をお兄ちゃんに披露しているだけです！ 他意はありません！」

「料理の腕を……?？」

「ええ、厨房のエミヤさんやタマモキヤットさん、そしてお兄ちゃんに料理を教わった私の腕前は今やカルデアの食堂で出しても問題ないレベルです！」

バン、と効果音が聞こえてきそうなくらい堂々とした態度のジャンヌ。先ほどの悔しそうな表情はどこに行ったと言うのだろうか。

「くっ！ ねえ、貴方！ 今度私にも料理教えてくれないかしら？」

オルタは忌々しいものでも見たかのような苦虫を噛み潰したような表情をジャンヌに向けた後こちらを向いた。

「あ、ああ、勿論、俺で良ければ」

思わずそう頷いたが、思えば俺の料理の腕前自体はあまりジャンヌと変わりはないと言うことに気付いた。

「あ、でも俺よりもエミヤとかに聞いた方が……」

間違いなく料理の腕前で言えばエミヤの方が上だ。なのでこう続けた言葉は、

「いやよ。何で私が貴方以外の人間から何かを教えて貰わないといけないのよ?」

オルタによつて躊躇いもなく一蹴されてしまった。

「あ、あの……」

「どうした? リリイ?」

「私にも勉強と料理を教えてほしいんですが……」

俺の背中に未だに隠れていたリリイがちよんちよんと服を引っ張りながら言ってきた。

「ああ、別に構わないよ」

宝具を持つていない俺は普段からレイシフトに参加することは少ない。カルデアにいるサーヴァントで一番レイシフトしていないと言つても過言ではない。そうなると特にやることはなく暇な時が多くあるのだ。時間は余りに余っているので別に構わないと伝えると、

「ありがとうございます、お兄さん!」

リリイは花が咲いた様な笑顔になった。

この笑顔が見れたのならちよつとくらいの苦労は訳ないな……。なんて人知れず思った時に気付いた。

——あれ? これ話がだいぶ脱線していかないか?

確かこれはリリイの部屋割を決める話し合いだった筈なのにいつの間にかこうなったんだ。ふと、ダヴィンチと立香の方に目をやれば微笑みを返された。どうやら、さきほどまでの会話を聞いて楽しんでたようだ。

「じゃあ、これで私とお兄さんが一緒の部屋と言うことでいいですね

！」

「何がいいですね、よ。良くないわ！ このガキンちよの頭には脳みそ入っているのかしら？」

「ダメに決まっています！」

「何ですか！ 勉強と料理をお兄さんから教わるのなら、一緒の部屋で暮らすのが効率的で論理的に正しいと思います！」

——あれ、これどこかで見た流れだな……。

結局話合いは難航したが、リリイが一人部屋で暮らすと言うことで終止符が打たれた。それと同時に俺の部屋は四方をドアに囲まれてしまった。

——どうしてこうなった……。

そのため息にも似た呟きは誰の耳にも入ることはなかった。

## 吹雪の止んだ深夜に

それは静かすぎる夜の事だった。草木も眠る丑三つ時、静寂が全てを支配していた。いつもなら多くの職員やサーヴァントが行き来をし多くの笑い声や雑談が聞こえてくるはずの廊下には誰もいない。長すぎる廊下は窓から差し込む月明かりだけに照らされ、どこか儂げにも寂しげにも感じられた。

——昼間とはだいぶ違うな……。

静寂の中足を進める。聞こえるのは、自分の足音と息を吐く音だけ。眠れない夜に気晴らしに散歩でもと思いい廊下に出てみたが誰もいないだけでこうも雰囲気が違うとは驚いた。カツカツと響く足音だけをBGMに更に足を進める。

暫く歩いた後、大きめの窓の前で足を止める。いつもは昼も夜も構わず吹雪いているのに、今日に限っては吹雪はなりを潜め、雪すらも振降っていない。雲一つない空には大きな月が浮かんでおり月光が静かに辺りを照らす。見えるのは純白に染められた山々だけだ。

雪は音を吸収する、だから雪が降れば静かだ。そんな話を昔聞いたことがある。それは確か科学的にも証明されていたことだった筈だ。雪は確かに音を吸収するのだろうが、それ以上に心理的に静かに、静寂に感じさせるような気がする。一步カルデアから外に踏み出せば、そこはここよりも遥かに肃々たる世界に違いない。寂しげに月光を反射する雪を見てそう思った。

——思えば、こうやって一人を感じるのは久しぶりだな……。

思い返してみると、ここ最近寝る時以外は常に誰かと一緒にいたような気がする。ジャンヌもオルタも昔から特にレイシフトがない時は基本的に俺の部屋に入り浸っているし、それに加えて最近はリイと仲の良いナーサリーとジャックもよく遊びに来てくれるようになった。その誰もが来ない日となれば、デオンが来る。そうなるべくるとよっぼどのことがない限り俺の部屋には誰かがいることになる。

別にそのことに不満はない。誰と一緒にいることに苦痛を感じる

性格でもないし、皆でワイワイと盛り上がるのは楽しいし、好きだ。でも、かと言って一人が嫌いかと言われるとそうではない。静かに一人孤独で何かを考えるのが好きだった。ここに来る前、冬木でもそうだったし、そしてあのフランスでの日々でもそうだったように、一人になって考える時間というのは必要だ。

こうして窓の外に深々と降りつもる雪を見るとあの時の事を思い出す。

あの中世フランスでのクリスマスあの日のことだ。凍てつく様な寒さの中、隙間風の吹きこむあの朽ちた教会で自らに問いかけた。

——俺がこの世界に来たことに何か意味があるのだろうか……？

あの日の答えは出た。

あの日と同じく、今の俺の中には疑問がある。カルデアに来てからずっと心の奥底で眠っていた疑問だ。

——俺は、俺は一体何者だろうか……？

小さく吐いた息はただ虚空に消えていった。

その答えはまだ出ない。

「ほう、これは珍しい」

月明かりだけが差し込む静寂な廊下をぼんやりと一人歩き、ドリンクサーバーやソファアなどが設置されている少し開けた休憩スペースへと足を踏み入れた時だった。急に声を掛けられた。視線を向ければソファアに腰かける一人の男が目映った。紺色の陣羽織に身を包んだ和服の美丈夫は静かに月明かりの下にいた。

「ああ、小次郎か」

全くの不意打ちだと言うのに少しも驚愕の念が浮かばなかったのはきつと掛けられた声が落ち着いたものだったからだろう。微量の動揺なく言葉を返せた。

彼の名前は佐々木小次郎。最早日本人では知らない人がいないだろう剣豪だ。優雅に座る彼の横には代名詞である物干し竿が壁に立て掛けられていた。

「眠れぬ夜に外に出て見ればめずらしいことに今宵は吹雪いていない。そして、幸運にも満月と来た。よって、月見酒と洒落込んでいたのだ」

何気なくそう言った侍の右手には赤い杯、そして左には一升瓶が座りよく置かれていた。

「月見酒か……なるほどこの風景は確かに肴になるな」

「流石、隊長殿だ。酒のこともよく分かっている。更に欲を言えば日の下であれば今は花見の季節。桜があればなお良い」

「隊長と呼ぶのは辞めてくれ、何だか小次郎に呼ばれると恥ずかしい」  
日本人男子なら誰もが一度は憧れる男、佐々木小次郎。物干し竿と呼ばれる長刀を物の見事に扱い、燕をも切ったとも言われる「秘剣燕返し」の使い手。そんな彼に隊長と呼ばれると何だかむず痒く感じられる。

「そう言えば、確かに今は四月か……花見のシーズンだな」

小次郎の言葉で今の季節を思い出した。四月も初旬、日本では春と呼ばれる時期だ。暮らしているのが年中吹雪いているカルデアだと常夏ならぬ常冬なのでスツカリそのことを失念していた。そして、桜の下で月と桜を肴に杯を傾ける美丈夫を想像してみた。直ぐに脳内に浮かんだその映像はとても絵になった。流石は色男、桜とも月とも見ごとに調和している。

「花見酒に月見酒、その両方が味わえる季節はこの季節だけよ」

まあ、ここでは叶わない話なるが、そう付け加えて彼は笑う。ジャンヌとは違い薄く微笑むような笑みだったが、彼女と同じようにその笑みからは邪な感覚は一切しなかった。

「まあ、確かに……じゃあは桜なんて夢の又夢だもんなあ」

窓の外の雪景色を見ながら応える。相変わらず雪は降っておらず、ただ静寂だけが支配していた。

「桜は儂く散つていく。人の夢と同じ事よ……。夢か幻か。だから桜は美しい。人の記憶に残る。人の心を掴む。それにまあ、日の下では見ることの叶わない春の雪見酒と考えれば、これはこれで一興よ」

彼もまた俺と同じように窓の外の降り積もる雪を見つめながら口を開いた後、手にする朱色の盃に酒を注ぐと、グツと手を伸ばしこちらに向けてきた。

「さて、隊長殿。酒はいける口であろう。ここは一杯如何かな？」

差し出された盃、その水面には俺の顔が揺れ湯らと揺れていた。

「なあに、別に兄弟の盃を交わそうとかそんな事ではない。ただ盃がないだけだ。気軽にぐつといてくれ」

小次郎とから盃を受け取り、そのままグツと一気に酒を煽る。米の風味が鼻を突き抜け、まろやかな甘さが喉を通る。

——美味しい。

素直にそう思った。生憎、彼が持つ一升瓶には銘が刻まれていないが、さぞかし名高い日本酒だろう。少なくとも俺が今まで飲んだことのある日本酒の中では一番美味しい日本酒だ。

「ほう、流石は一個小隊の長。いい飲みっぷりよ」

彼は今度は豪快に笑った。そして、笑いながら空になった盃に酒を注ぎ、次は自ら煽った。

「さて、隊長殿。今宵の予定はお決まりか？ 暇を持て余しているのなら、季節外れの雪見酒と共に洒落込むのはどうかな？」

笑いながら問いかけてくる小次郎に対して、

「これだけ美味しい酒を前にして嫌とは言えないなあ」

俺も笑いながらそう返すのだった。こうして、日本から遠く離れたこのカルデアにて美丈夫との季節外れの雪見酒が始まった。

「そう言えば、ここでこうして隊長殿と二人きりで話すのは初めてのことになるか」

盃を傾けながら小次郎が、はたと気付いたようにそう言った。

「そうだな、そう言えばそんな気がするよ」

俺ももうこのカルデアにやってきて結構な時が経つし、小次郎に限っては最古参といってもいいサーヴァントだ。お互いに長い間カルデアで生活して来たと言うのに思い返してみれば二人で話す機会が一度もなかった。

「二人で話すどころか小次郎と会話したこと自体が何だか少なかつたしな」

「まあ、それは仕方ななからう。お主の隣には大抵あの聖女か彼女のオルタナティブがいる。悪気はないのは分かっているのだが、私が傍にいると無意識の内に警戒させてしまうのでな。悪いと思つてあまり近づかなかつたのだよ」

小次郎の言葉を受けてジャンヌ達の態度を思い出す。

「ジャンヌもオルタも悪気はないんだ。許してやってくれ」

「勿論、分かっているとも」

小次郎はそこで言葉を区切り、酒を一口飲むと盃を俺に差し出す。俺も黙つてその盃を受け取つて残っている酒を一口含む。

——ああ、やっぱりこの酒は美味しい。

「それにあの時は別として、ここでの出会い頭の件については私が百悪いのでな」

「確かにあの時は焦つたよ。まさか出会い頭に斬りかかられるなんて」

あの一刀を避けられたのは奇跡だ。今思い出しても肝が冷える。悪寒がする。

「そこは軽い戯れとして笑つて流してくれると嬉しい」

「ああ、分かつてるよ。小次郎に殺意がなかったことくらい」

そう、もしも彼が俺を殺す気だったのなら、俺はあの一撃で真つ二つだったに違いない。

——だからきつと俺が今、こうして酒を飲んでいるのはきつとそういうことだ。

「なあ、隊長殿。私は、雪を見ていると思ひ出すことがある」

空になった盃になみなみと酒を注いだ後、美丈夫は真面目な口調でそう切り出した。何時もの飄々とした笑みはどこかに消え失せ、まるで戦場に立つ侍のような顔持ちで窓の外を見ていた。

俺も目を外にやれば、いつの間にかパラパラと雪が降り始めていた。

「覚えているだろう？ あの前で起こった戦争を」

——もちろん。

降りゆく雪を見ながらそう応える。そして思ひ出す。

忘れられる筈もない。あの冬を、あの戦争を、そしてあの戦いを。今でもはつきり覚えている。あの戦争の終わりの日、柳洞寺にて剣を振ったその日は、

——確かに今のような雪がちらついていた。

「なあ、お主は知っているか？ 私があの戦争に望んだ願いを……？」

いや、と素直に応える。

「私はあの戦争に強者との戦いを望んだ。何分生前は山で剣を振り回すだけで対人相手にその得物を振るつたことがほとんどなかったものでな。強者どもに我が剣技どこまで通ずるのか試してみたかったのだ」

俺は黙って彼の言葉を聞く。彼の言葉は徐々に熱を帯びていく。

「あの戦いは本当に愉快だった。多くの猛者がいた。獣のような俊敏な動きの槍兵、ギリシアの大英雄、そして、ブリテンの騎士の王……。皆強かった。一刀一刀が打ち合う度に心が躍った。血が滾った。あの戦争、確かにこの身は敗れたが、私は概ね満足していた」

しかし、だ。と美丈夫は熱の籠った口調で続ける。

「しかし、だ。あの戦争で唯一の心残りがあつた。もはや言うまでもな

いことだろうが、お主の首を取れなかった。それだけがあの戦争での私の心残りだ」

そう言い切ると小次郎はぐつと盃の中の酒を飲み干した。俺は何も言えずその様子をただ見つめ、彼の言葉を待つ。

「初めて会った時は、何の変哲もないただの有象無象だと思った。多少剣に心得があつたようにも見えたが、所詮は人間。それにブリテンの王の様な迫力もなかった。獣如き殺気も感じなかった。一太刀で終ると確信すらしていた。しかし、結果はどうだ。一太刀を耐え、二太刀も耐え、三合四合とサーヴァント足る私の剣と打ち合つてなお、お主の息はあり、そしてあの山門から逃げ帰った。そして二度目もそうだ。あの赤毛の青年と共に我が前に立ち、そして生き延びた」

熱を帯びた小次郎の言葉に、俺は静かに言葉を返す。

——貴方のために祈ります。

俺がああ戦いで生き残れた理由はきつと、

「あれは、たまたま——っ」

続く言葉強制的に切り落とされた。眼前にいつの間にか刃が迫っていた。月光を受けて雅に光るその刀は名刀物干し竿。その剣先が今俺ののど元に突き付けられている。冷や汗が流れる。廊下に落ちた盃がやけに響く音を立てて転がる。小次郎はやる気だ。言葉を間違えればこの首は刎ねられるだろう。

「謙遜も過ぎると美德ではなくなると心得よ。たまたま？ 偶然？

確かに私は山門に囚われていた。二度目の時は時間がなかった。ああ、確かにそうだ。しかし！ しかしだ！ そんな安価な理由で我が剣技から逃れられると本気で思っているのか？ 我が剣技確かに対人相手に試した回数は少ないが、燕をも切り裂いた剣をただの偶然で生き残ることが本当に出来ると思っているのか？ もしも、そうならこれ以上の侮辱はないと心得よ！」

射抜く様な殺気を受けてようやく己の愚かさを知った。

「悪かった。俺が馬鹿だった」

口から出たのは心からの言葉だった。

——ああ、俺は何て馬鹿な奴だろうか。

感嘆にも似た心の叫びはきつと小次郎にも伝わっているだろう。

ふと、圧力が消えた。殺気が消えた。目の前から刀が消えた。

「ふっ、分かってくれればいいのだ」

驚かせて悪かった、美丈夫はそう続けて刀を鞘にしまう。

「ずつと、気になっていたことがあった。あの戦いの事だ」

廊下に転がる盃を拾い直して小次郎が呟く。

「我が最後の一太刀。あれはお主に届いたのか、否か」

彼は何時もの飄々な笑みを浮かべて廊下のある一角を見た。

——なるほどね、ここで彼を巻き込むのか……。

俺も先ほどの小次郎の言葉に思うことがあったので彼に乗っかることにする。

「さあ……どうだったろうな。肩を切り裂いたのかもしれないし、利き手を吹き飛ばしたのかもしれない。はたまた脚だった気もするし、刃は届いていなかったかもしれない」

「ほうほう、隊長殿も覚えていないとな？」

にやりと上がった口端。

「ああ、だからこういう時は……あの時の状況を可能な限り再現すればいい。なあ、そうだろう!？」

廊下の一角。小次郎が視線を飛ばしていた場所に声を投げかける。そこで話を聞いているのはだいたい前から分かっていた。分かっていたが本人が混じろうとする気配が無かった為、気付いていない振りをしたに過ぎない。

「やれやれ。深夜に怪しい声がすると思い近寄ってみればまさかこんな羽目になるとは……」

そこにいたのは紅い弓兵。やれやれと手を竦める彼はこちらに近づいてきた。どうせ全部聞いていたのだから説明はしない。

「ほう、これは面白い。奇しくもあの時と同じメンバー。これは再戦のチャンスと見たがいかに?」

美丈夫の言葉に、弓兵が続く。

「同じメンバー? 何を言っている? 俺はあの何も出来ない赤毛の小僧とは違うぞ。それに俺も少しばかり悪魔の軍の隊長に借りが

あつてだな。是非とも生前取れなかつた一本を取つてみたいと思つていたところだ」

難色を示すと思われたが意外と乗り気な弓兵を見て驚く。何だかどいつもこいつも血気盛んな奴らが……そう言う俺も最早止まる気はなかつた。売られた喧嘩は買わないと男がすたるし、何よりも慕つてくれていたあの部下たちに申し訳ない。

「ふつ、よく吠えたなエミヤ。生前一本も俺から取れなかつたというのに、よく言つた。先輩と後輩の差は絶対に埋まらないということをおしえてやろう」

「それでは三つ巴の戦いで異議はないな。では、トレーニングルームにでも忍び込むとしようか……我が秘剣お前たちに存分に味合わせてやろう」

小次郎はそう言うベンチから立ち上がり歩きはじめる。その背中を追う様に紅い弓兵、俺と続く。

こうしてある静かな夜、熱い戦いの火蓋が切られた。

勝敗は——それは想像に任せるとしよう。

## カルデアの夜に最後のマスターと 前編

基本的に地球上でも最も辺鄙な場所の一つであろう所に城を構えるカルデア周辺の天気というものは、いつも嵐か雪かのどちらかであり、お日様が姿を表すのは一週間でも数時間だけという時期も珍しくもない。それに夜となればより一層雪も吹雪も嵐も起こりやすく常にカルデアを吹き飛ばそうとするかのような風のうねり声が聞こえるのが日課だった。

しかしながら、運よく嵐も吹雪も雪もそして風さえも吹かない静かな夜も訪れる。

——そう、これはそんな運のいい深夜の小さなお話。

ここにきてずっと騒がしい毎日を送っていたからだだろうか、静かな夜は寝られないことが多くなった。たとえば、表がまだ煩い時に寝ても音がなくなるとふと目が覚めてしまう。

——音のしない世界で目が覚めた。

どうやら外の吹雪もいつの間にか止んだのか、風の音も聞こえなくなっていた。部屋に一つだけ置いてあるデジタル時計に目を向ける。温かみの欠片もない静寂な時計は午前2時を少し回った時間をただ示していた。

——酒も入っていない、静かな夜は嫌いだ。

色々なことが勝手に思い出されてくるから……。

しようがない、気晴らしに酒でも飲むかと、体を起こしたところで思い出した。先日、小次郎とエミヤと一緒にトレーニングルームで模擬戦を勝手に行い、あまつさえ半壊させたことで、禁酒の刑を言い渡されていたんだった。

別に一本くらい酒を飲んだところでバレはしないだろうが、これではジャンヌ達、ひいてはリリイに非常に後ろめたい気持ちを抱いてしまう。それに罰は罰だ。悪いのは全面的に俺たちだ。ならば、ここは

我慢するしかない。

——気晴らしに散歩でも行くか……。

どうせ部屋にいても眠れぬ夜を過ごすのなら散歩でもしたほうがよっぽど有意義な時間の過ごし方だろう。部屋を一步踏み出した俺の姿を下弦の月が静かに照らしてくれた。

風の止んだ深夜のカルデアは非常に静かだ。まるで誰もいない世界を彷彿させるとさせる。昼まではまるで聞こえない自分の足音を鼓膜に響かせ、時には歩き、時には止まり、ゆっくりとカルデアの中を歩く。

窓の外には白銀世界と下弦の月。それらを額縁のように覆うカルデアの大きな窓ガラスはまるで著名な画家が書いた名画のようだった。

——名画か、なるほど面白い。

自分自身で面白い考えだと思った。俺は芸術のことなんて、知らないし、分からない。カルデアでも芸術作品には縁がないほうどころか、ワースト5に入る自信すらある。

この窓ガラスの外の風景も見る人が見ればそこまで素晴らしいものではないかもしれない。

しかし、それでも俺はかまわない。どうせ俺しかここにはいないんだ。すると、その瞬間にこの窓枠は額縁へと進化し、素晴らしい風景は絵画へ化ける。

そして、その何十枚もの絵画の前を、ただいい絵だ、と偉そうに感想を垂れる俺はきつとそこらの富豪よりもよっぽどいい思いをしているだろう。

——たまにはこんな夜があっても罰はあたるまい。

小さく口端を上げたそんな時だった。俺に小さな別の足音が聞こえてきた。

——ん？ この時間に珍しい。

足音の主は俺に気づいているのか気づいていないのか分からないが、その音は着実に俺のもとへと向かっていった。

引くべきか、それともここに残るべきかを考える。足音の犯人で困るのがダヴィンチとジャンヌ達だ。いうまでもなくダヴィンチにもジャンヌ達にも昨夜の乱戦の件で小言を頂戴したばかりだ。そんな有難いお言葉を聞いた直後からこうやって夜出歩けば印象も……下がることはないと思うが色々と面倒臭い。行動に制限を付けられる可能性もある。

しかし、この足音からしてそのどちらかでもなさそうだ。まず、ジャンヌ達があいつらの部屋は俺と同じ方角なので消去法的に外れる。次にダヴィンチだが、彼女のとの付き合いは短くない。彼女ならまるで自分がこちらへ向かっているぞと分かるような足音を出す。なので、彼女でもない。

足音を消そうと努めて、しかしやはり小さく聞こえてくる足音の犯人としてもつとも妥当なのは……。

時間にしてあれから30秒ほど経った後、曲がり角から姿を表した彼女と目を合わせる。

まるで彼女は俺がここにいるとは露とも思っていないかったようで、大きく目を見開いた。そんな彼女に努めて優しく声をかける。

「こんばんは、マスター。いい夜じゃないか」

俺の声を受けた人類最後希望は、まるで悪戯がバレた子供のようにそのブラウンの瞳を足元へ泳がせた。

「……こんばんは、隊長さん、いい夜だよね」

いつもと同じ声色のはずなのにその声は確かに普段と違って俺には聞こえた。

「吹雪もやんで物は試してと散歩をしていたら、マスターと会えるなんてな今夜はいい日だ」

そういつて笑う俺を立香は少し俯きながら見ていた。

——なるほど、ここまでか……。

俺にはここにいる文字通り歴史に名を刻んだ英霊たちのような優れた知識も、力も、カリスマも、腕力もない。

鸞翔鳳集（らんしょうほうしゅう）といつても過言ではない英霊のほとんどは俺よりも遙かに知識があり、見分に優れている。

俺に分からないことを、俺には持っていないものを誰も彼もが持っている。

——しかし、だ。

——誰にも分からなくても俺にだけ分かることもあるんだ。

英雄だから分からないこと、神だから分からないこと、王だから分からないこと、知識人だから分からないこと、聖女だから分からないこと——そして、俺だから分かること。それは確かに存在する。

「ああ本当にいい夜だ。静かで本当にね……」

薄く笑みを浮かべる俺の顔を彼女はおずおずと見つめながら、

「あ、あの……私、もう部屋に戻って休みますね！ 次の特異点が見つかるかもまだ分かりませんし……」

そう言ってくるりと踵を返して走り去ろうとする彼女の手首を掴む。

「え……？」

掴まれると思っていなかったのか、彼女は驚いた顔になった。

「ちよつと、待ってくれ、マスター。俺はマスターがバイタルの問題から深夜の外出制限がされているのを知っている。そして、俺も実をいうとこの間のトレーニンングルーム半壊事件の犯人として深夜徘徊を止められている。お互い規則を破った同士ここは深夜の雑談でも花を咲かせようじゃないか」

もちろん俺に深夜徘徊の制限なんて物はないのだが、ここは嘘も方便ということで許してもらおうと思う。でないと、色々な意味で手遅れになる。そう今だからまだ間に合う。そして、それはきつと今現在

においては俺にしか出来ないことだ。

「……………」

俺の誘いに彼女は逡巡するそぶりを見せる。そりゃそうだ、俺が彼女をそうやって個人的に誘い出すのは今回が初めてのことなのだから。

「なに、別にとつて食べようとして訳じゃないよ。カルデアの不良同士の友情を育もうってだけさ。ほら、お互いに秘密をばらされると困るんだから、裏切られる心配もないしね」

「……………」

「それにほら、」

「それに……………」

小首をかしげる彼女に向かってさらに続ける。

「何、ちよつとくらい夜更かししても罰なんて当たらないさ」

「で、でも、もしもバレたら……………」

「その時は——誘った俺が悪いんだすべて俺が悪いことにして開き直っておけ。それでも昔、悪魔と呼ばれた存在だぞ。誰よりも悪役には向いてるよ」

そういつて笑って見せれば、

「うふふ、そうですか。ではお言葉に甘えて夜更かししましょうか。でも、駄目ですよ、隊長さん。私と隊長さん両方悪いので一緒に叱られないと」

彼女はようやく笑顔を見せてくれた。

「それじゃあ、行こうか。実は食堂にケーキと上物の紅茶の葉を隠しているんだ。夜間の飲食は勧められた物じゃないんだけどね。どうせ既に決まりを破っている不良なんだ、今日くらい悪さしても何も罰なんて当たらないよ」

「ケーキと紅茶……………」  
いい組み合わせですね！  
ぜひご一緒させてください」

「おっと、その前に……………」

調子を取り戻して彼女に向かって人差し指を立てて言う。

「お互いバレると大変な身、足音を立てずにそーつとね」

「はい、そーつとですね！」

俺と同じく声を落としてしゃべる彼女と目が合い、お互いに小さく笑う。

それを見て確信する。

——ああ、まだ間に合う。

忍び足で食堂へ向かう二人の背中を下弦の月が静かに照らしていた。カルデアの夜はまだ明けそうにない。

## カルデアの夜に最後のマスターと 後編

——さて、そろそろ頃合いかな。

カルデアの食堂にてケーキと一杯目の紅茶を食べ終え、二杯目の紅茶も半分ほど飲み終わったころ、本題に入るために紅茶を飲んでいる彼女にゆつくりと声をかける。

「なあ、マスター。一つ聞いてもいいかな？」

「なに？ 隊長さん？」

甘いものを食べたせいもあつて幾分か顔色のよくなった彼女は随分機嫌がよさそうだった。

「なんで深夜に外出したりしたんだ？」

俺だからこそ分かること、そして俺だからこそ出来ること。

「え？ ……それは」

予想だにしていなかった質問に彼女が瞳が揺らぎ、顔が俯く。

そんな顔をしていた人間を知っている。彼は結局狂う前まで追い込まれた。いや、きつと彼は狂ってしまったのだらう。狂ってしまったえばどれだけ楽だっただらうか。

「……深夜の散歩に……」

その声は想像以上に小さく、そして震えていた。

「別に責めている訳ではないよ。でも、俺が知っている君は言いつけを破つて深夜に徘徊するような子じゃなかったはずさ」

「……………」

目を完全に伏せてしまった彼女のティーカップに紅茶を注ぐ。新しい紅茶は白い小さな湯気を下弦の月へ上らせる。

「じゃあ、マスター。——少しだけ話を聞いてほしい。どうだらうか？」

「話ですか？」

「ああ、一人の男の話さ」

彼女が俺の顔を見て、こくんと一つ頷いたことを確認する。

半分だけ残った自分のティーカップのの紅茶を啜ると彼女を目を

しつかりと見ながら口を開く。

「なに、長い話でもない。ある男のどこにでもあるような詰まらない話さ。その男は、静かな夜が嫌いだった。音のない暗い暗い夜が大嫌いだった」

——この話は本当はするべきことではないのかもしれない。

彼女は知らなくていい話なのかも知れない。でも、俺は話すことにした。俺だから話せる話だから。そして、他の誰でもない彼女にだからこそ。

彼女なら暗いものをじつと見つめてその中にあるためになるものを掴める筈だ。

「それはその男があることを思い出すからだった。その男はある国の兵士だった。まあ、兵士といっても正規軍じゃなくならず者の寄せ集めで作った隊の人間だった。その隊の扱いはあまり良いものじゃなくてね、素行が悪いからと正規軍とは区別されていてね。寝る場所も食う場所も食うものも違った」

「そして、その隊はならず者で構成された隊。扱いもほとんど消耗品と同じ、戦いなら一番やり、負け戦なら、殿。国はならず者たちを自動で処分でき、軍は正規兵を安全に運用できる。実に合理的な考えだ。戦の度に多くが死んだ。命ってなんて軽いものだろうか、と思うほど命に重さはなかった。まだ鳩の羽のほうが重かっただろう。間違いないくあそこは地獄だった」

「そんな隊に男が所属して初めての戦があった。その戦いでも多くの仲間が死んだ。だが、男は運よく生き残った。そして、男はその日初めての戦の疲れからか、テントに戻るとすぐに泥のように眠った」

「しかし、寝る時間が早かったのか、男は深夜に目を覚ます。そう、その日も今日のように音のしない夜だった。男が真つ暗なテントの中でぼーっと虚空を見つめている時だった。ふと、体を悪寒が襲った。昨日まですし詰め状態だったテントなのに、誰のいびきも、寝言も、呼吸音もしなかった」

「男はその時になって実感する。

——ああ、みんな死んだんだったな、つと」

「その瞬間、彼は胃の中の物をすべて出した。戦中は生きることには必死になつていたため気にならなかつた光景がその時になつて脳裏に思い浮かんだ。先頭を駆けていた男は弓のハリネズミのようになり死んだ。隣を走っていた青年が味方の誤射で頭を射貫かれ死んだ。そいつは昨日共に酒を飲み馬鹿話をしていたやつだった。槍で貫かれ死んだ奴もいた。剣で首を叩きおられて死んだ奴がいた。投石で体がバラバラになつた奴もいた」

「ここまで俺の話聞いた彼女は小さく「それって……」と呟く。

その呟きに首を縦に一つ振り、紅茶を啜る。

「そう、これは俺の体験談。もう少しで話も終わるからもうちよつとだけ付き合つてほしい」

「……はい」

「君も知っている通り俺はその隊の隊長にまでなつた。多くの戦いを経験した。死体なんて何十、何百、もしかしたら何千と見たかもしれない。多くの戦を経験してもどうしても静寂な夜の日には眠れなかつた」

「脳裏に浮かぶんだ。

——死んだ奴らの元気だつたころの顔と、その死に様が。

戦争が激化すると、人の形を保つたまま死んだ奴らは運がよかつた方だった。大砲なんて出てきた日には死体の数と居なくなつた人間の数が相当数違つたこともよくあつた」

「その時はよく考えたものさ」

「何をですか？」

先ほど違い顔をまつすぐと上げ、こちらを見る彼女に対して続ける。

「皆、俺を恨んじやいないのかつてね」

「……………」

小さく息を飲む音が聞こえた。

「致死率150パーセントの隊、地獄一番街、明日なき隊なんて言われてきた酷い隊。そんな隊で何故か常に俺は生き残つた。俺より後に入つてきた人間も多くいた俺よりも若い人間も多くいた。でも、その

多くが死んだ」

「死んでいった人間は絶対に生き残った俺を恨んでいる。そんなことを考えていたよ。そして当時はよく聞こえたものだった。静寂な夜にはね。死んだ仲間の声で恨みつらみが」

「そこまで話すと息を一つ吐き、暖かい紅茶をティーカップに入れ一口。」

——うん、やはり紅茶は暖かい方がいい。

「まあ、もちろん今ではきちんと折り合いを付けているし。もう幻覚が聞こえることもない。でも、静かな夜はやっぱり当時のことを少しだけ思い出す。そんな時は上手く寝つけなくてね。気晴らしに出てみたらマスターと出会ったって訳さ」

「一段落ついたところで目の前に座る彼女に紅茶のおかわりは必要か聞く。」

「彼女が小さく頷いたのを確認してティーカップに紅茶を注ぐ。さて、ここからが本番だ。」

「さて、マスター。別に俺は強制しない。深夜に散歩している理由も聞かない。でも、話すことで楽になることもある。君の顔を見てすぐに確信できたよ。マスター、最近寝れてないだろ？」

「本人は上手く隠しているつもりかもしれないが、俺からすれば丸わかりだ。」

「……そ、それは」

「話し相手が俺では不満かな？」

「い、いえそんなことはないです。隊長さんは頼りになりますし！」

「人生とは選択の連続であり、そしてその選択はタイミングを見誤ると、大きなしっぺ返しを食らう。」

——ここだ、今日この時だ。

「だからこそ、タイミングというものは重要であり、見誤ることは許されない。つまり、彼女の話聞き出すのに今日この時以上の物はない。」

「ならば、畳みかけるほかあるまい。」

「マスター、聞いてくれ。カルデアの他の誰でもない俺だからこそ君

を理解できることもあるんだ」

「え？ 隊長さんだから理解できること？」

「そう、俺も君もこのカルデアの中では異色だからね。いうなれば似たようなもんさ」

「それって……」

「君もうすうす感じていいるだろう。俺とマスターの共通点を」

「……………」

彼女は考えを言葉にしようと口を開く動作をしたが、それは結局音にはならなかった。

——なるほど、やっぱり彼女も気づいているか。

「カルデアってのは凄い場所だと思わないか？ 古今東西の英霊がいて、魔術を極めた奴らや、どっかしらに特化した技術者が集まって。古今東西、世界中どこを探したってこんな場所はなかっただろう」

「……………そうですね」

「この場所にいると時たま考えることがある。なんで、こんな場所に俺みたいな奴がいるんだろうってね」

「……………っ！」

「君も感じたことがあるはずさ。どうして、ここに私なんかがいるんだろう？ ってね」

俺の言葉に彼女は肯定も否定もしなかった。ただ目を逸らしただけだった。でも、俺にはそれで十分だった。

「俺とマスターとの共通点。それは簡単なことだよ」

「——俺もマスターも凡人だ。つまり才能も何も無い、ちよつと剣の腕前がある人間と、ちよつと魔術の心得があるだけの凡人同士ってわけだ」

「っ！ 私と違って隊長さんは凡人じゃないです！ 隊長さんは戦争にも行って戦い抜いて、特異点では世界を救ったじゃないですか!」  
「君も分かっているだろう。俺が生き残ったのは聖女の祈りがあったから、それがなければ遥か前に死んでいたよ。それに特異点に関してはそのも特異点じゃなかった。俺が居なければ世界が滅びることもなかった。ただそれだけの話さ。俺がしたことなんて何も無い歴史

上にもなかったことになっている」

結局俺には何も変えれなかった。正史通り歴史は俺の存在をなかつたかのように扱い聖女はきちんと塔に幽閉され、燃えていった。

「でも……」

「マスター」つ面白い話をしてやろう」

まだ踏ん切りがつかない彼女にさらに続ける。

「？」

「俺が戦争にいった理由は知ってるか？」

「確か、育ての親の敵討ちに……」

「そう、その通り。俺は両親の敵討ちのために軍に入った。イングランド兵にそれなりの恨みつらみを持ってね。さて、ここで問題だ。敵討ちで軍に入り、その実一番槍を任される隊に所属して、一番敵とぶつかり合う兵士が本当に誰も殺してないというのはあり得るだろうか？」

「……っ！」

彼女の顔がはつとし、息を飲んだのがはつきりと分かった。

「あり得るわけがない。不殺を心がけるのであれば軍隊なんて所属していない。『結果』として『不殺』になったんだよ。殺したくても殺せなかった。殺そうとしたさ、でも、殺せなかった。相手を害そうとした瞬間体が自分の意志とは関係なく変な動きをしたり、あるいは動かなくなったり、あるいは運よく躲されたり……」

—— 貴方のために祈ります。

今は昔聖女の祈りを一身に受けた男がいた。

結局のところ、

—— 『不死不殺の悪魔』なんてものは

ある聖女の祈りである『不死』と、世界からの呪いによって生まれた『不殺』が複雑怪奇に組み合わせられた幻想に過ぎないのだ。

「俺には兵士の一人すらもどうしようも出来なかった。それはそうさ、俺は英雄でもなければ神でもない、勇者でもなければ英霊でもない。ただの凡人さ。凡人に歴史を変えることは出来ない。なあ、俺はただ凡人だろう？」

別に英雄になりたかった訳でも、なれるとも思ってはなない。そもそも俺に英雄とはむず痒い。おそらく何十回、いや何百回と生まれ変わってもそれらになれるとも思わない。

「でも、隊長さんはここに召喚されて……」

「そう、俺は何かの間違いでこの呼ばれてしまった。その意味をずっと考えてきた。そして、その答えが出た」

魑魅魍魎も英霊が闊歩するカルデアにこの凡庸たる身が呼ばれたのか、短くない時間考えてきた。

初めはジャンヌ達との縁やら、召喚装置のバグだと思っていた。そして、それは間違いないだろう。

しかし、召喚は偶然の産物かもしれないが俺が今、ここにいる意味はある。

「それは一体？」

俺がこのカルデアにやってきた意味――

「それは、きつとマスター、――貴方を一人にしないためだ」

彼女の睡眠不足は、俺ですら分かるのだ。ダヴィンチや、ドクターロマン当たりは勿論のこと他の数人のサーヴァントも分かっているはずだ。

しかし、誰もフオローをしていない。それは、カルデアの誰もが彼女の救い方を知らないのだ。

それはそうだ。人類最後の希望と言われていようが、彼女はただの女の子なんだ。

英雄でも、神様でも、王でも、知識人でも、聖女でもない。

――彼女はただの凡人だ。

ちよつと魔術の適性のある女の子だ。

カルデアは才能ある者たちの楽園。だからこそ、誰も彼女のことを分らない。持っていない人間のことを理解できない。

しかし、だ。しかし、俺なら理解できる。

――何も持っていない凡人である俺だからこそ、彼女の気持ちを理解できる。

カルデアにいる誰もが出来なくて、俺にだけできること。

古今東西の英雄のように彼女を物理的に助けることは出来ないが、それ以外の部分では俺が彼女の助けとなる。

凡人だからこそ彼女を理解でき、凡人だからこそ彼女とともにカルデアの中で際立ってられる。

詭弁でもいい、道化でもいい。それでも彼女が救われるのであれば、この身はそれでいいのだ。

なぜならこの身はサーヴァント。サーヴァントの役割とは単純明快、

——マスターを守ること、ただそれだけだ。

「それって……」

「カルデアは才能ある者たちの楽園。マシユですらデミサーヴァントだ。マスターと違い戦闘ができる。でも、マスターはただ魔術の適性があっただけの女の子。そして、俺は言わずもがな、少し腕の立つ一般兵。才能ない者同士お互い浮いているってわけだ」

「うふふ、なんですか、それ」

俺の言葉に彼女はようやく笑顔を見せてくれた。

「だから、話してみないか？ マスター、俺にマスターの悩みが解決出来るとは思わないが、一緒に悩むことなら出来るはずさ」

彼女はしばらく手元にあったティーカップの水面に視線を落とし、顔を上げた。

透き通ったブラウンの瞳が俺を移す。

「悩みがあるっていうことも分かっているんですね」

「ああ、勿論。そんな顔をしていた人間を一人よく知っていたんでな」  
今は昔、狂いたくても狂えなかった男がいた。

「それって……」

「そう俺のことさ。死が隣人どころかとなりで腕を組んでる状況が日常茶飯事で、死に怯えながらも何一つ変えれずにいた時のな」

誰一人殺せないと知った時、諦めにも似た絶望を味わったと同時にもっと恐ろしいことに気づいた。

——本当の意味でこの世界で俺は一人ぼっちなんだな。

それに気づいても狂わなかったのは果たしてよかったことなのだ

ろうか、それは今では分からないが、同じ思いを彼女にさせるわけにはいかない。

「……分かりました。お話しします」

俺の思いが通じたのか、彼女はぽつりぽつりと話し始めた。

初めは、魔術の適性があると分かり喜んだこと、初めてマシユと戦闘をした時のこと、初めて特異点を訪れたときのこと、初めて英霊と出会った時のこと。

「多くのことがあったんだ」

彼女はそういつて薄く笑う。

「楽しいことも一杯あった。辛いことも一杯あった。でもね、最近怖いんだ」

ぽつりぽつりと湧き出る感情を言葉に変えて彼女は話す。

「特異点での戦闘が最近過激になって来ているんだ。相手のサーヴァントも強くなって、そして容赦なく私を狙ってくる」

「わたし、わたし怖いんだ……マシユが、皆が私を守ってくれるって分かってる。でも、でも……」

声は震え、やがて嗚咽交じりになる。

人類最後の希望と呼ばれ、常に魑魅魍魎がうごめく戦場に立たなければいけない彼女のプレッシャーが如何ばかりと察するのも烏滸がましい。

藤丸立香は普通の女の子だ。

そんな彼女が周りからのプレッシャーや死への恐怖へ勝ち続けられる訳がない。

「わたし……わたし、死ぬのが怖いんです。死ぬのも怖いし、私が死んだら、世界が減ぶという事実も怖いんです」

「私が立たなきや、私が戦わなきや世界が減びる。そんなことは分かっています！ でも、でも！ どうしようもなく、足がすくむときがある！死ぬのが怖くて動けなくなる時もある！」

一際大きな声で話す彼女をみて漸く俺は藤丸立香に出会えた気がした。

「最近眠れないんです。死んでしまったらどうしようとか、世界が滅びたらどうしようとか考えてしまつて……。カルデアの職員さんたちの笑顔や、特異点で出会った人たちの笑顔が、私には世界を救って英雄になれと言っているようにしか見えないんです！ 私には、私は普通の女の子なのに！」

まるで心の中をすべて吐き出すかのように、感情を叩きつけたあと、立香は小さく続けた。

「ねえ、隊長さん私は、私はどうすればいいんですかね？」

彼女の話聞いて考える。

英雄でも、神様でも、王でも、知識人でも、聖女でもない。凡人の俺だからこそ出せる答えを考える。答えはすんなりとすぐに出た。それはそうだ、凡人にか出せない答えとはすなわち俺の考えそのままだからだ。

飾りたてしなくてもいい、別に拙くても、ここ数日で泣き疲れて涙も枯れてしまったブラウンの瞳しっかりと見つめる。

——真つすぐに喋れば光線のように心へ届く。

いつかの昔、インディアンの中で使われていた金言を俺は信じている。

「なあ、立香」

あえてマスターではなく名前と呼ぶ。これはマスター藤丸立香への言葉ではない。女の子としての藤丸立香への言葉なのだ。

「なんですか……」

「立香は、立香は頑張ったよな」

俺の言葉が気に障ったのか立香は目を釣り上げると睨むようにして俺を見る。

「頑張った……？ 頑張ったからなんになるって言うんですか!? 頑張った賞でも貰えるんですか!? 馬鹿にしなさい！ 頑張ったところで世界が滅びたら何の意味もないんです！」

そうさ、かつての俺もそうだった。頑張ったところで何も変わっていないければ何も意味がないと本気で思っていた。

「立香、頑張ったことに意味はあるんだよ」

「どうしてそんなことが言えるんですか？」

「君の頑張りをここにいる全員が覚えている。それだけでも十分なのさ」

「世界が滅びたら、そんなことは関係ありません」

「今は昔、過去にとんだ男がいた。男は聖女に恋をし、ちよつとだけ頑張って世界を救った。しかし、世界の修正力は強力で男の功績は何一つ消されて残ってはいなかった」

「なんですか？　また自分の話ですか？」

「そうだな。男は何一つ変えることが出来なかった。聖女は塔に幽閉され、ならず者の集まる隊から一人の男の痕跡が消えた。でもな、歴史に残らなかつた男のことを彼女や彼らは覚えていた。確かに頑張ったところで結果は変わらなかつたけど、どうだい？　頑張ることに意味はあつただろう」

俺は確信したい。人間の頑張り、人間の祈り、そして、人間の思いに意味はあるのだと。

「それは……」

「それにな立香。君はもう十分頑張った。ここにいる誰もがそれを証明できる。だから——」

しっかりと立香の目を見て続ける。

「——本当に、全てが嫌になつたら、逃げてしまえ」

「え……？」

予想打にしていなかった言葉だったのか立香の動きが止まる。

「逃げるって……逃げてしまつたら世界が滅びて……」

「世界なんて滅ぼしてしまえ——なあ、立香。世界を救うなんて役目、凡人には重すぎると思わないか？　一人の女の子の双肩で支えるのは重すぎる。世界を救うのは英雄の役目じゃないか？　凡人がするにはお門違いも甚だしいと思わないか？」

「……………」

「そもそも世界を救うなんて英雄の役目だ。その英雄英霊たちがどうしようもないのに、凡人に何が出来るんだって思わないか？」

未だにぼかんとしている立香に続ける。

「それにな、俺は思うんだ。——こんな小さな女の子を犠牲にして助かる世界なら、そんな世界はいらないってね」

その言葉は本心だった。だかこそ、立香の心に届くと信じている。「な、なんですか、それ!？」

オメラスという理想郷の話を知っているだろうか？

ここではない何処かにある理想郷だ。君主制も奴隷制もなく、人々は精神的にも物質的にも豊かに暮らしている。そんな理想郷だ。しかし、そのオメラスは一人の子供の犠牲の上に成り立っている。

ここはオメラスではなくカルデアだ。それは重々承知している。しかし、俺は彼女の存在がオメラスの地下に囚われている犠牲になった子供に重なって仕方がない。

「何って言われれば俺の本心だよ。立香の頑張りやカルデアの天才達が、英雄であるサーヴァント達が、そして凡人である俺が知っている。君が本当に逃げたいのであれば世界中の誰にも文句を言わせない。例え神様であってもだ」

「だから、立香。無理はしなくていい。本心のままに行動してほしい。君がどのような道を選ぼうが、少なくとも俺は君を応援する。決して裏切りはしない。君が本当に戦闘から逃げ出したいと願うなら相手がどこの誰であれ、この俺が血路を切り開こう」

「……………」

立香はしばらく、視線を上下左右に動かし、何かを考えたあと、ぽつりぽつりと言葉をつづけた。

「そんなこと出来るんですか？ 隊長さんは私と同じ凡人なのに」

「出来るさ。この身は確かに凡庸なれど、今は昔、戦場では悪魔と恐れられ、そしてある冬の聖杯を巡る争いでは化け物共を相手に生き残った、不死の悪魔。女の子の一人逃がすくらいは朝飯前さ」

立香の問いかけに自信満々といった笑みを浮かべて答える。

「ふふ、なんですか、それ、さっきまで凡人だのなんだの言っておいて結局悪魔なんですか」

小さく自然な笑みを浮かべる彼女を見て、俺も笑い返す。やはり彼女にはこの笑顔が似合う。

「女の子の前では恰好付けておきたいものなんだよ。男ってやつはさ」

「なーんか腑に落ちませんがそういうことにおきましよう。ありがとうございます。話を聞いて貰えて何だか楽になった気がします」  
まるで憑き物がとれたかのような笑顔を見せる彼女に、

「それにさっきの話は本当さ。君が逃げたい、投げ出したいと心の底から願うのであれば、俺はどこまでも付き合うさ。何せ俺は——君を一人にしないために呼ばれたサーヴァントだからな」

——まあ、ただし地獄へ行くことが確定しているから、天国までは付き合えんけどな。

そう付け加えておくことも忘れない。

「何ですか、それ？ 地獄だったら付き合ってくれますか？」

「ああ、これでも地獄一番街と揶揄されてた隊の隊長だ。地獄なんてなんて庭みたいなものさ」

「うふふふ、何だか隊長さんでしたら地獄もまた面白そうですね」

そう言つて笑う彼女に、俺は、

「勘弁してくれ。天国に行ってくれないと、ジャンヌあたりから小言を言われそうで怖いんだ」

「悪魔でも怖いものがあるんですね」

「そりゃ悪魔だからな聖女には弱いと相場が決まってるのさ」

俺の言葉に彼女は笑った。もう何も心配しなくてよさそうだ。

さて、と。やるべきことも終わったところで時計を見ればもう夜も明ける時刻。立香には数時間とはいえ睡眠をとらせるべきだろう。

くあ、と小さなあくびをしている立香に洗い物はやっておくから、自室に戻るよう促す。

「分かりました。お言葉に甘えます。何だか今日は久しぶりに寝れそうです」

「ああ、ダヴィンチやロマンには少しだけ起床時間を伸ばすように伝えておく。起こされるまではゆっくりとおきな」

「ありがとうございます。また、悩みがきたら相談に来てもいいですか？」

ぐーつと背伸びをしながら立香はそう言った。それに対する俺の答えは言うまでもない。

「ああ、勿論。今度も上手い紅茶を用意しておく」

俺の言葉に、

「あれ？ ケーキは用意してくれないんですか？」

立香は揶揄うようにそう言うのだった。

「なあ、立香」

部屋を出て行こうとする彼女の背中に声をかける。

なに、最後に一つ言うべきことを思い出したに過ぎない。

「なんですか？」

「凡人にも世界を救うことは出来るよ。かつての俺がそうだった」

「なんですか、それ。さつきはもとに戻しただけだとか言っていた癖に」

「いや、他の誰も覚えてなくても君は覚えてくれているはずだ。俺が確かに特異点を解決したことを。案外簡単かもしれないぜ、俺は惚れた女を救ったら、一緒に世界まで救ってしまっただけだ」

凡人でも頑張れば世界を救える。伝えたいことは伝えた。後は彼女次第だ。

「うふふふふふ、今はそれで騙されておいてあげます。でも、もしも  
の時は……」

「分かっている。悪魔は契約は守るんだ」

こうして、カルデアの深夜の物語は終わった。

白んだ空に下弦の月はいに見えなくなっていた。

## 第六特異点編

### その一

「ここまでにしましょうか」

そう言つて目の前の人物は手に持っていた訓練用の槍を地面に突き刺した。

綺麗なブロンドの髪を後ろでくくり、青い戦闘服に身を包んだ彼女はいい汗を掻いたと清々しく笑う。彼女はセイバー、真名をアルトリア・ペンドラゴン。かの有名なアーサー王伝説に出てくるアーサー王だ。

彼女のことはここに来る前から訳があつて知っていた。その時は彼女の真名を知らなかったため、純粹にセイバーと呼んでいた。その癖で俺はこのカルデアでも彼女のことをセイバーと呼んでいた。

「そうだな、良い時間だし」

その声をうけ、俺も手に持っていた西洋剣を鞘に納める。時計の針を確認すれば休憩するにはちょうどいい時間だった。

今俺たちがいるのはカルデアの中にある訓練施設だ。サーヴァントのために常時解放されているここでは腕に自信があるサーヴァント達がお互いに切磋琢磨技術を磨き合つたり、筋トレをしたり、そして時々ま喧嘩をしたりと思ひ思いに過ごせる空間だった。

俺もこうして時々ま腕が鈍らないようにここを訪れることがあつた。基本的にレイシフトに呼ばれることが少ないから暇なんだよ。

「しかし、まさかあのアーサー王がここまで槍も扱えるとは驚いたよ」  
額に浮かぶ汗をタオルで拭いながらセイバーに笑いかける。アーサー王と言えば聖剣エクスカリバーのイメージが強かったが、槍の腕も相当のものらしく見事な槍裁きを見せてくれた。見事なまでのその腕前は、何度か手を合わせたことのあるランサークラスの英霊たちとそんな色ないように感じられた。

「まあ、私は剣だけでなく槍も持っていましたから」

「確か、聖槍ロンの槍だっけ？」

「ええ、本当の名をロンゴミニアドと。生憎、セイバーのクラスで呼ばれたので実物は今はないのですが、聖なる槍に相応しいものでしたよ」

「へえ、そうかそれは是非実物を見たかったよ。ま、アーサー王のエクスカリバーが見れただけでも俺は満足だけどな」

「そうですか……では次はそのエクスカリバーでお相手しましょうか？」

「勘弁してくれ、宝具を持っていない俺にどうしろと……」

あの戦いで俺の宝具は砕け散り喪失した。それにより今の俺には宝具が無かった。部屋に置いてある西洋剣はエミヤに作って貰った贗作だし、それも最近は鞘から抜かずに物干しぎお代わりになっている。

「うふふふ、冗談ですよ。それにしても、貴方の剣は本当にためになります。天賦の才によって振るわれる才の剣ではなく、合理的に物事を追求した理の剣。その理の剣を自分を守るために追及した貴方の守りは硬い。純粹な剣技だけで見れば貴方の守りはこのサーヴァント達に引けを取らないばかりか一步上を行きますね。英霊エミヤに対してもその剣の最初の指南をしたのは貴方だと聞きますし本当に大したものですよ」

「よせよせ、それは買いかぶりすぎだ。それに俺には攻める手段がないんだし、セイバーたちの方が何倍も上だって。それにエミヤに関していえば俺は本当に障りを教えただけで、今ではエミヤの方が遙かに上を行っているさ」

俺は攻める剣というのが壊滅的だった。死なないことだけを意識して剣を振るってきたからか、守る方はそれなりに出来るようになったのだが、それが攻めに転じるとどうしようもなくだめになる。攻めようとすれば大きな隙が出来、逆に致命傷を負いやすかった。どうやら凡人の俺にはどうやら攻める剣にさくほどキャパシティーは持っていないようだ。

「謙遜も時と場合によっては美德ではなくなる時もあるんですよ。久し振りとは言え私の振るう槍で傷一つ負う素振りのなかった貴方の

腕は本物です。この私が保証しましょう」

「かのアーサー王のお墨付きを貰えるとは、俺もまだ捨てた物じゃないのかもな」

「ええ、誇って下さい。まあ、貴方の場合かの救国の聖女の師匠であり、彼女のお墨付きでしょうから、私の言葉は余計かもしれませんが……」

「そんなことないよ。それにあいつらは一応戦えるけど、剣術とか槍術とかはさっぱりだし」

一応ジャンヌもオルタも二人とも剣は持っているのだが、その腕前は言わずと知れたものだった

。二人とも暇を見ては俺が指南をしているのだが、まだまだ腕前だけで見れば一般人の域を出ない。まあ、二人ともサーヴァントなため、一般兵に比べると遥かに強いのだが。

本当を言えば俺なんかに剣を教わるより、他に優秀な人材はカルデアには多くいるのだが、彼女たちは頑なに俺から教わることを望み、今までその関係は続いている。ジャンヌには「私の師匠はお兄ちゃんただ一人、他の人から教えを乞うなんてそれが何でも嫌です」と拒否されたし、オルタには「他のサーヴァントから教えを乞えと？ 何を言っているのかしら？ 寝ぼけているのなら顔を洗って来るべきよ。いいかしら、私に何かを教えることが出来るのは貴方だけの特権よ。英雄も英霊も神ももっていない貴方だけの特権。だから、貴方はありますがたくそれを使って私の相手をもっとするのよ」と相手にされなかった。

「だから、セイバーの褒め言葉は純粋に嬉しいよ。励みになる」

「そうですか、それならばよかったです」

セイバーはそう言って笑い、

「それではもうそろそろお昼にしますか。よろしければ一緒にどうでしょう？」

そんな提案を俺にしてくれた時だった。

——ドン。

そんな大きな音を立てて訓練場の扉の一つが開けられた。

「おお！ここに居たか！」

いきなり訓練場の扉を開け放ったその人物はキョロキョロと場内を見渡し、俺たちを見つけるとドシドシとした足取りでこちらに向かってきた。

「イスカンドルではないですか、どうかしたんですか？」

セイバーがその人物、イスカンドルに問いかける。

「おう、セイバーか。実はその人物に用事があったな」

「俺ですか？」

イスカンドルが指をさす方向には俺。

「うぬ」

俺の問いかけにイスカンドルは一つ大きく頷くと、

「実は少し困ったことになってだな——」

そして、そう続けるのだった。

「——すうすう」

イスカンドルに呼ばれた先は食堂のある一角だった。食堂の隅、いつもお酒好きのサーヴァント連中が飲んでいるその一角で一人のサーヴァントが机に突っ伏しているように寝ていた。

黒いドレスのような衣装に最近また伸ばし始めた銀色の髪。見慣れた後ろ姿でそいつは気持ちよさそうに寝ていた。

そしてその周りの床には焦げたような跡があり、彼女の傍には誰もいなかった。みんな少しだけ離れた所に座っている。

「あ、待ってましたよ」

俺の顔を見つけるなり駆け寄ってきたのはジャンヌだった。休みだということもありラフな格好をした彼女は他のサーヴァントもいる手前か敬語モードのジャンヌだった。

「何だかイスカンドルに呼ばれたんだが、何かあったのか？」

「それが……」

ジャンヌは少し困った顔で頬を掻き、机に突っ伏している彼女を見る。

「——ああ、なるほど」

彼女の机には赤い液体の入ったグラスが置いてあった。古今東西ワイングラスに入っている飲み物と言えば決まっている。

——酒飲んだな、あいつ。

「いや、実はあそこまで弱いと思ってなくてな。すこしばかりからかったら、ぐいぐいと勢いよくグラスを仰いでそのままコテンとな」  
罰が悪そうにイスカンドルは言った。

「それで、何が問題なんですか？」

「いや実は酔いつぶれた彼女を部屋に運ぼうとしたんだがな。触ろうとすると火を操って攻撃するしてくるのだ」

「は?」

「いや、嘘だと思うかもしれないが本当なのだ」

「ええ、師匠。イスカンドルさんのいう事は本当です。私も試しに触れようとしたのですが……」

彼女はそう言うのと焦げた服の袖を俺に見せる。

「私はまだよかった方らしく、イスカンドルさんが触れようとした時には辺りを燃やし尽くすような感じだったのだとか」

なるほど、これで彼女の周りの床が焦げているのも、誰も彼女の傍にいないのも理由が分かった。

——しかし、それを俺に言っただろうというのだろうか。

あれか俺に焼け死ぬというのか? ただえさえ一度焼死したのに

もう一度焼死しろというのか？

「流石にいつまでもここで寝かせておくわけにはいかんからな。そこで、お主に彼女を部屋まで送り届けてほしいのだが……」

「いや、でも誰も触れなかったんではよ？ 俺にも無理ですって！」

「いや、もう師匠しかいません。師匠が無理なら誰にも無理ですって！」

「いや、でも……」

「余はうぬと聖女の間係をいまいちよく知らんが、それでも聖女がうぬなら間違いないというのならそうなのだろう、だから頼む」

かのイスカンドル大王にそこまで言われていまえば行動しないわけにはいかないだろう。誰も触れなかったとなると俺も燃やされそうな気しかしないのだが、それでも物は試しだ。

「分かりました。試しにやってみます」

「おお！ そうかそうか！」

イスカンドルの言葉を背中に着つつ、彼女の横まで近づく。

「——すうすう」

可愛らしい寝息を立てている彼女に人に危害を加えるような雰囲気は感じなかった。

——ちよんちよん。

しかし、恐ろしい話を聞いた手前恐る恐る彼女の腕を突いてみる。

——反応はなし。

どうやら俺はまだ燃やされないようだ。

「おい、大丈夫か？ 寝るなら部屋で寝ろ」

今度は肩を掴んで軽く揺さぶってみる。

「……うーん、何なの……」

すると彼女はゆっくりと体を机から起こし、寝ぼけ眼で俺を見た。ちなみにその顔はアルコールの影響か赤く染まり目はトロンと蕩けていた。

そして、彼女は俺を見るなり、イスから倒れ込むような形で俺の方へ倒れ込んできた。

「——すんすん。この匂いは……」

「ちよつと、オルタ何やってんだよ！」

「うふふふ。貴方の匂いだ。私の大す——」

「——ちよつと！ 何をやっているんです！ 私！ お兄ちゃんから離れて下さい！」

そんなオルタの声をかき消すように大声をジャンヌは出す。少しばかり焦っているのか俺の事を師匠ではなくいつも通りの呼び方で呼んでいる。こりや冷静になった時にあたふたするパターンだな。

「むう〜！ いけ好かない聖女の声がある。聖女さえ居なければ私は私だけのものに……」

そして、オルタは何を思ったのかジャンヌに右手を向けると、

「——灰になりなさい」

容赦なく炎で攻撃するのだった。

守りの固いジャンヌのことだから大事に至る事はないだろうけど、食堂は酷い有様になっていた。こりや後でエミヤに怒られるな。

「えへへ、これで邪魔者はいなくなつたわね」

未だに俺に抱き着いたままオルタは言う。多分オルタは酔ってここがどこかも、そしてどういう状況かも分かっていないだろう。

でなければ、あのオルタがこんなことを言ったり俺に抱き着いたりするはずがないのだ。

これだけ食堂で大騒ぎすれば確実に他のサーヴァントの耳にも入るだろうし……ああ今から色々と頭が痛い話である。

「とりあえず、酔っているみたいだから部屋に行こうか」

「部屋に行く？ 部屋に行くって……なんだそういうこと、ね。いいわ、早く行くわよ」

何となく根本的な部分で会話が噛み合っていないような気もするが、それでも彼女が動いてくれるだけましだろう。部屋に行つて寝れば酔いも覚めるだろうし。

「よくもやってくれましたね……！」

そんな時だった。所々服を焦がしたジャンヌが俺たちの前に出てきた。服はチリチリになっていたが怪我はどこにもないようだった。

「あら、まだいたの、聖女さん？ 私は今から彼と“二人きり”で部屋に行くから貴女に構っている暇はないの」

「——なっ!? それはどういう……。いえそれがどういう意味でもそればかりは阻止しないといけません」

「邪魔しないでくれる。聖処女の貴女には理解できないことを私たちはするのだから」

「なっ!? それを言うなら貴女だって処女でしように!?!」

「あら、それはどうでしょう？ それにもし私が処女だとしても、それは今日までかもしれないけどね」

——もしかして、ジャンヌも酔っているとかパターンなのか？

何だかよく分からんうちに始まったジャンヌVSジャンヌの争いに俺はどうしようもなく頭を抱えたくなるのだった。

そして、その争いは段々とエスカレートし、食堂にいたサーヴァント全員を巻き込みカルデアの食堂は半壊することとなるのだった。ちなみに、食堂にいたサーヴァントも含め全員、相打ちにより意識と記憶を飛ばしてしまったため、ことのあらすじを知るのは誰もいなくなったのは二人のジャンヌにとってはいいい結果となったのかもしれない。

そして、この日第六特異点が見つかったと言う発表がカルデア全域に広まるのだった。